

柳田国男著『日本の昔話』総覧

—— 旧版・新版覚書 ——

高杉 遊葉 名護 峻河
平田 沙帆 三宅 遥
藤井 佐美

序

柳田国男著『日本の昔話』は昔話の魅力を広めると同時に、以後の収集調査を格段に進める契機となった書でもある。当初柳田がまとめた昭和五年版（以後、旧版）は、柳田の思いを引き継いだ丸山久子・石原綏代の作業により昭和三五年版（以後、新版）へと改訂された。結果的に旧版・新版をあわせると全一五五話が昔話の標準型として紹介されたことになるが、その多くは現代の伝承に結びついていないとはいえない。

二〇二〇年度日本文学科二年生の伝承文学専門演

習bでは、旧版（新潮社文庫）と新版（角川学芸出版）の両版を比較しながら全話を輪読した。授業ではあらずし、注記内容（伝承地、出典、伝承背景など）を通覧し昔話研究への理解を深め、履修者は個別に課題を設定して発表報告をおこなった。本稿はその成果の一部で、主な内容は以下の通りである。

- 一、旧・新版の目次
- 二、昔話解説
- 三、昔話一覧と伝承地
- 四、考察
- 五、参考文献一覧

現在、昔話の世界に触れる機会は皆無に等しい。概説にとどまるものの、本稿を介して柳田が残そうとした昔話の再確認が可能となれば幸いである。

一、旧・新版の目次

旧版目次

猿の尾はなぜ短い	猿聾入り	蟹淵と安長姫	湊の杵
海月骨無し	山の神の鞆	竜宮の鐘	狐が笑う
雀と啄木鳥	驚の卵	山父のさとり	夢を買った三弥大尽
鳩の孝行	弘済和尚と海亀	飯食わぬ女房	蛸島の虻
時鳥の兄弟	猿正宗	牛方と山姥	だんぶり長者
時鳥と百舌	春の野路から	天道さん金ん綱	藁しべ長者
鼻染め屋	黄金小白	鬼と神力坊	炭焼小五郎
蝉と大師様	はなたれ小僧様	金剛院と狐	二十騎が原
鷓鴣も鷹の仲間	松子の伊勢参り	俄か入道	長者の宝競べ
狸と田螺	水蜘蛛	小僧と狐	会津の鶴塚
貉と猿と獺	泥鼈の親方	片目の爺	湖山の池
猿と猫と鼠	やろか水	比治山の狐	梅木屋敷
猿と墓との餅競争	御辛勞の池	芝右衛門狸	本取山
	米良の上漆	山伏の狸退治	鶯姫

瓜子姫	長崎の魚石	杖つき虫	かせかけみみず
米囊粟囊	瓜の大事件	首筋に蒲団	鼻染め屋
山姥の宝蓑	死後の占い	知ったかぶり	鷓鴣も鷹の仲間
竈神の起り	乞食の金	やせ我慢	狸と田螺
矢村の弥助	拾い過ぎ	慾ふか	貉と猿と獺
狐女房	山賊の弟	物おしみ	猿と猫と鼠
盲の水の神	力士と産女	盗み心	猿と墓との餅競争
爺に金	女の大力	聾の世間話	古屋の漏り
大歳の焚き火	大い子の握り飯	下の国の屋根	猿聾入り
笠地藏	日田の鬼太夫	博奕の天登り	鶯の卵
団子浄土	稲妻大蔵	空の旅	春の野路から
瘤二つ	藤抜き喜内		金の斧銀の斧
奥州の灰まき爺	阿波の大力熊野の大力		黄金小白
海の水はなぜ鹹い	仁王とが王		はなたれ小僧様
八石山	旦九郎と田九郎		蛇の息子
犬頭系	分別八十八		水蜘蛛
狐の恩返し	二反の白		山父のさとり
聴耳頭巾	無言くらべ		飯食わぬ女房
雀の宮	古屋の漏り		牛方と山姥
黒鯛大明神	清蔵の兎		人影花
蜥蜴の目貫	鳩の立ち聴き		天道さん金ん綱

新版目次

猿の尾はなぜ短い	海月骨なし	雀と啄木鳥	鳩の孝行	時鳥の兄弟	時鳥と百舌	片足脚絆	雲雀の金貸し
----------	-------	-------	------	-------	-------	------	--------

山梨の実
三枚のお札
古箕にふるしき、古太鼓
にわか入道
小僧と狐
片目の爺
たのきゆう
化けくらべ
猫と狩人
湊の杵
味噌貝橋
夢を見た息子
寝太郎三助
だんぶり長者
薫しび長者
炭焼小五郎
金の椿
鶯姫
瓜子姫
竹の子童子
米ぶくろ粟ぶくろ

山姥の宝蓑
姥皮
繪姿女房
竈神のおこり
寄木の神様
矢村の弥助
狐女房
蛙の女房
蛇の玉
爺に金
大歳のたき火
ものいう藁
笠地藏
銭の化物
見るなの座敷
鼠の浄土
かくれ里
団子浄土
風の神と子供
瘤二つ
灰まき爺

鳥吞爺
団栗を噛んだ音
白餅地藏
狼の眉毛
狐の恩返し
木仏長者
聴耳頭巾
黒鯛大明神
山の神と子供
三人兄弟の出世
槍を持った星
海の水はなぜからい
餅の木
分別八十八
二反の白
仁王とが王
無言くらべ
鼠経
蛙の人まね
そら豆の黒いすじ
百足の使い

清蔵の鬼
鳩の立ちぎき
杖つき虫
首筋にふとん
木のまた手紙と黒手紙
しったかぶり
やせ我慢
慾ふか
物おしみ
盗み心
聾の世間話
下の国の屋根
博奕うちの天登り
空の旅

二、昔話解説

ここでは旧版・新版を所収順序に従って整理し、両版あわせて全一五話のあらすじ、伝承地、話型、教訓、テーマ等を担当者が解説した。なお、両版所収の有無は○×で示した。

1 「猿の尾はなぜ短い」旧○、新○

- ①長い尾を持つ猿が、熊に魚の捕り方を相談した。
- ②寒い晩に猿は尻尾を水につけ、魚がくつつくのを待った。
- ③尻尾を引き上げようとするが、凍ってしまったので抜けない。
- ④無理に引っ張り尻尾はちぎれ、顔も赤くなった。

旧版伝承地…出雲

新版伝承地…島根県松江、『日本伝説集』高木敏

雄

話型…二A 尻尾の釣りAT2

テーマ…猿の外見

2 「海月骨無し」旧○、新○（「海月骨なし」）

- ①竜王のお妃が猿の肝を欲する。
- ②家来の亀が日本の島の猿を竜宮に誘う。

③門番の海月が、肝を食べられるために来た猿を笑う。

④猿は肝を木に干してきたと言って陸に戻る。

⑤亀は海月が喋ったに違いないと竜王に訴える。

⑥海月は皮を剥がれ、骨も抜かれた。

新版出典…『沙石集』五

話型…三五 猿の生肝cf. AT91

テーマ…クラゲの外見

教訓…あまりお喋りだと痛い目に遭う

3 「雀と啄木鳥」旧○、新○

- ①雀と啄木鳥の姉妹の親が病気になった。
- ②雀は化粧中でも飛んで行って看病した。
- ③啄木鳥は化粧をしてから向かったので死に目に会えなかった。
- ④雀は美しくないが人間の傍で食料を得ることが出来る、啄木鳥は美しいがあまり食料を得られない。

旧版伝承地…津軽

新版伝承地…青森県北津軽郡松島村米田小字末、

『津軽口碑集』内田邦彦

話型…四七A 雀孝行

テーマ…雀と啄木鳥の生態と外見

教訓…見た目を気にするよりも大事なことがあ

る

4 「鳩の孝行」旧〇、新〇

- ① ひねくれ者で親の言うことを聞かない鳩が居た。
- ② 親は子の性質を分かっていたので、死ぬ時静かな山ではなくわざと川原に埋めるよう頼んだ。
- ③ 子は親が死んでから言う事を聴いておけばよかったと気づき、言いつけを守った。
- ④ 鳩は雨が降りそうになると、川原に拵えた親の墓を案じて鳴く。

旧版伝承地…能登

新版伝承地…石川県鹿島郡、『鹿島郡誌』

テーマ…鳩の鳴き声

教訓…親の言うことは聞いておいた方がいい

5 「時鳥の兄弟」旧〇、新〇

- ① 時鳥の兄弟の弟はとても親切で、薯のおいしいところは兄に食べさせていた。
- ② 兄は弟のほうがおいしい薯を食べていると疑い、殺してしまう。
- ③ 弟の腹から出てきたのは筋ばかり多い薯だった。
- ④ 兄は後悔し薯を掘る時期になると弟が恋しいとないて飛び回る。

旧版伝承地…越中

新版伝承地…富山県

話型…四六 時鳥と兄弟

テーマ…時鳥の鳴き声

6 「時鳥と百舌」旧〇、新〇

※同じ題名で伝承地の異なる二つの話が所収されている。

- ① 沓職人の時鳥と馬方の百舌がいた。
- ② 百舌は沓を打つてもらうが、代金を支払わない。
- ③ 時鳥が代金はまだかと鳴く頃、百舌は隠れている。
- ④ 百舌は樹の小枝に虫を刺しておいて時鳥の機嫌を取ろうとする。

旧版伝承地…紀州那賀郡

新版伝承地…和歌山県那賀郡、『郷土研究』四ノ

七

話型…七〇 時鳥と百舌

テーマ…時鳥と百舌の関係

【別話】

- ① 酒好きの百舌が、時鳥から仏様を買うために預かっていた金で酒を飲んでしまう。
- ② 時鳥が本尊掛けたかと催促して鳴く頃、百舌は黙って隠れている。
- ③ 百舌は酒のせいか、きまりが悪いからか、赤い顔

をしている。

旧版伝承地…紀州有田郡

新版伝承地…和歌山県有田郡、『郷土研究』四ノ

四

話 型…七〇 時鳥と百舌

テーマ…時鳥と百舌の関係

7 「片足脚絆」旧×、新〇

①とくぼうという鳥が、麦のいがをのどに詰まらせた。

②友達の間がとくぼうの親に知らせた。

③親鳥は片方だけ脚絆を履きかけたまま飛んで行ったが、とくぼうは死んでしまった。

④親鳥は麦のみる頃、とくぼうと鳴きながら飛び、その足は片方だけ毛が生えている。

新版伝承地…広島県佐伯郡大柿町、『芸備叢書昔

話の研究』広島師範郷土研究室編

話 型…五八 片足脚絆

テーマ…鳥の鳴き声と外見、親の子への愛情

8 「雲雀の金貸し」旧×、新〇

※同じ題名で伝承地の異なる二つの話が所収されている。

①雲雀はお天道様に金を貸したが、返してもらえな

い。

②ゼンクレ（銭くれ）と鳴きながら催促してのぼる。

③暑くなつて、クレーと鳴いて降りて来る。

新版伝承地…石川県河北郡高松町、『加能民俗』

十五号

話 型…六八 雲雀金貸

テーマ…雲雀の鳴き声

【別話】

①雲雀は頬白に金を貸した。

②雲雀はサーヤレ（早くよこせ）と催促する。

③頬白はチンチンカエシマシヨ（少しずつ返しませよ）と答えている。

新版伝承地…鹿児島県肝属郡、『大隅肝属郡方言集』野村伝四

話 型…六八 雲雀金貸

テーマ…雲雀の鳴き声

9 「かせかけみみず」旧×、新〇

①みみずと墓がお互いに着物を作ることにした。

②みみずは細い糸で念入りに作ったが、手間がかかりくしゃくしゃになってしまった。

③墓は太い糸で手早く作ったが、無造作な着物が出来上がった。

④みみずは糸をかせのまま巻き付けたので、首の周りに糸をまきつけたあとがある。

⑤墓が汚いのはその粗末な着物をきているから。

新版伝承地…大分県大野郡上井田村、『直入郡昔話集』鈴木清美

話 型…七六 かせ掛け蚯蚓

テーマ…みみずと墓の外見

10 「鼻染め屋」旧〇、新〇

①染物屋の鼻は、オシヤレな鳥の真つ白な衣装を染める依頼を受けた。

②炭のように黒く染まった衣装に鳥は腹を立て、鼻をいじめた。

③鼻は森の奥に隠れ、たまに鳥に見つかっては酷い目に遭っている。

旧版伝承地…陸中岩手郡

新版伝承地…岩手県岩手郡平館村、『日本伝説集』

高木敏雄

話 型…鼻紺屋 A T 8

テーマ…鼻と鳥の関係

11 「蟬と大師様」旧〇、新×

①弘法大師が乞食のような服で諸国の田舎を巡っていた。

②ある村の百姓はその身なりを見て、宿を貸すのを断った。

③後からそれが弘法大師だったと気づき、樗に登り大師を呼んだが間に合わない。

④七月に樗の木にちばひめという蟬が集まり啼くのは、百姓が大師を呼び続け蟬になったからだ。

旧版伝承地…常陸

テーマ…ちばひめの鳴き声

12 「鷓鴣も鷹の仲間」旧〇、新〇

①鷹の酒盛りの仲間に入るため、鷓鴣は猪を捕って来るよう言われる。

②鷓鴣が猪の耳の中に入り、猪はあばれて岩の角に頭をぶつけて死んでしまう。

③鷓鴣は鷹の仲間に入り酒盛りをした。

④熊鷹が負けん気になって飛び出したところ、二匹の猪を見つけた。

⑤欲深くどちらも捕ろうと思つて片足ずつ猪にかけた所、熊鷹の股は裂けてしまった。

旧版伝承地…播磨

新版伝承地…兵庫県、『民族』一ノ五

話 型…一九B 鷓鴣は鳥の王 A T 221. cf. A T 120
テーマ…鷓鴣は身体が小さくても鷹の仲間

教訓…欲を出すと良いことにはならない

13 「狸と田螺」旧〇、新〇

① 狸と田螺が伊勢参りをした時、伊勢の大神宮様まで競争しようと田螺が提案する。

② 田螺は狸の尾へ捕まり、楽しんで狸と同じだけ進んだ。

③ 鳥居の傍に着いた狸が嬉しくて尻尾を振ると、田螺は石垣にぶつかり転がる。

④ 田螺の貝は半分割れたが、見栄をはって先に着いて肩を脱いで休んでいたと言った。

旧版伝承地…紀州

新版伝承地…和歌山県有田郡、『有田童話集』森

口清一

話型…一一 田螺と狐 AT 275

テーマ…田螺は見栄っ張り

14 「貉と猿と獺」旧〇、新〇

① 貉と猿と獺が、蘆を一枚と塩を一吠と豆を一升拾った。

② 賢い貉は、猿に蘆を使って樹の上から方々を眺めることを提案し、獺に塩を使って池で魚を浮かせることを提案した。

③ 猿は樹から滑り落ち足を挫き、獺は塩水の中に入

り目が染みて爛れてしまった。

④ その間に貉は女房と豆を食べてしまい、おできが出来て苦しむふりをした。

⑤ 猿と獺は貉に文句を言いに行ったが、貉も苦しんでいるのでお互い様だと帰った。

旧版伝承地…越後

新版伝承地…新潟県南蒲原郡、『越後三条南郷談』

外山曆郎

話型…七C 貉と猿と川獺 AT 3

テーマ…貉のずる賢さ

15 「猿と猫と鼠」旧〇、新〇

① 爺が婆の織った木綿を売りに出る。

② 雌猿が猟師に撃たれそうになっているのを見かけ、それを留める。

③ 猿は助けられたお礼にご馳走をしてもてなし、爺が帰るときにはお礼に猿の一文銭を渡した。

④ 木綿は売れなかったが、猿の一文銭のお蔭で金持ちになる。

⑤ 近所の良くない人がその話を聞き猿の一文銭を盗む。

⑥ 爺と婆は猫に三日以内に猿の一文銭を探してこなければ殺すと脅す。

⑦猫は鼠に三日以内に猿の一文銭を探してこなければ殺すと脅す。

⑧鼠は無事に見つけ出し、皆いつまでも繫昌した。

旧版伝承地…因幡

新版伝承地…鳥取県八頭郡、『因伯童話』

テーマ…命に代えられるものは無い

16 「猿と藁との餅競争」旧〇、新〇

①正月の近いある日、猿と藁が餅を食べようとする。

②餅をついていた里の人を騙して、白を山の上に運んだ。

③二人で分けずに、白を転がして先に追い付いた方が全部食べようと猿が提案する。

④谷に落ちていく白を猿はすぐに追いかけた。

⑤藁はゆっくり行っていたが、白の中の餅が道端の萩の枝に掛かっていたのを見つけた。

⑥足の速い猿は無駄足をし、餅は藁のものになった。

旧版伝承地…越後

新版伝承地…新潟県南蒲原郡、『越後三条南郷談』

外山曆郎

話 型…二〇 猿蟹餅競争AT9C

教訓…独り占めしようとしても、いいことにはならない

17 「古屋の漏り」旧※137、新〇

①爺と婆が虎狼より古屋の漏りが怖いと話をしていたのを虎狼が耳にする。

②ちよūdōそこに馬盗人が入り、馬と間違ひ虎狼の背中に乗った。

③虎狼は古屋のみに捕まったと慌て、馬盗人は空井戸の中に振り落とされる。

④やってきた猿が虎狼から話を聞き、確かめようと尻尾を差し込む。

⑤馬盗人がその尻尾を掴み、猿の尾は切れてしまった。

旧版伝承地…肥後阿蘇郡

新版伝承地…熊本県阿蘇郡、『日本伝説集』高木

敏雄

話 型…三三B 古屋の漏AT177

テーマ…猿の外見

18 「猿聾入り」旧〇、新〇

①爺が広い畠の前に、娘を嫁に出すから猿でいいから手伝ってほしいと言った。

②それを聞いて猿が手伝ってくれたため、末の娘が嫁に行くことになる。

③嫁入り支度で瓶の中に縫い針を沢山入れ、迎えに

来た猿がそれを背負った。

④子供は何と名づけようかと話しながら山に向かっていたが、猿が川へ落ちてしまう。

⑤嫁入り支度を背負ったまま流された猿は泣きながら嫁と子を想い歌を詠んだ。

旧版伝承地…備中

新版伝承地…広島県比婆郡、『民族』一ノ六

話 型…一〇三 猿智入 A T 433 A

テーマ…異類婚姻を望んだ猿の愚かさ

19 「山の神の靱」旧〇、新×

①盲の琵琶法師が、路に迷い大木の蔭で一晩野宿をすることにす

②山の神様に旅の座頭の作法として平家物語を語った。

③座頭をねぎらう山の神の声が聞こえ、食べ物を勧められる。

④翌朝狩人が出て来て、座頭を靱に掴まらせて人里に案内した。

⑤里の子供が言うには、狩人は実は狼で靱は狼の尻尾だった。

⑥村長の家では昨晚、山の神からの言葉で客人のためのご馳走を作った。

⑦琵琶の上手な山の神の客人はこの盲法師だと分かり、尊敬した。

教訓…山には神が宿っている

20 「鷲の卵」旧〇、新〇

①蛇が蛙を追いかけるのをみて、百姓は娘を蛇にやるから止めるように言う。

②その晩から若い聾が娘の元を訪れるようになったのを心配し、爺が易者を呼び占う。

③娘は人間ではない者の子を身籠り死ぬ可能性があり、三つの鷲の卵を食べさせるように言う。

④聾に鷲の卵を取って来るように頼むと、聾は蛇の姿に戻り二つの卵は無事に持ってきた。

⑤三つ目を取りに上った時、蛇は親鷲に殺されてしまふ。

⑥易者は助けられた蛙で、三月三日に桃の酒を飲めば助かると言った。

旧版伝承地…肥前杵島郡

新版伝承地…佐賀県杵島郡、『民族』三ノ三

話 型…一〇五 鴻の卵 A T 433 A

教訓…助けると恩は返ってくる

21 「弘済和尚と海亀」旧〇、新×

①三谷寺を建てる時、装飾に必要な黄金が無い為、

弘済和尚が交易に出た。

②黄金を手に入れ帰ろうとした所、殺されそうになつていた海亀を見かけ助けた。

③帰りに海賊に遭い、金を取られてしまう。

④弘済和尚は海に入ったが、海亀の甲羅に乗せられ無事に帰ることができた。

⑤その後寺に金を売りに来た者の中にはその海賊が居たが、何も言わず対価を払った。

教訓…良い行いは自分に返ってくる

22 「猿正宗」旧〇、新×

①二人の飛脚が旅の途中で章魚から猿を助ける。

②猿が飛脚の持っていた大切な荷物を持って山へ行つてしまう。

③しばらくするとその猿が荷物とお礼の品を持って現れた。

④恩人の飛脚を足止めし、お礼の品を準備するために荷物を持ち去った。

⑤お礼の品は五郎正宗の名作の刀で、猿正宗と名付けられた。

話型…二三三A 猿報恩A T 160

教訓…良い行いは自分に返ってくる

23 「春の野路から」旧〇、新〇

①貧しい一人の爺が休みの日に酒を持って出かけ、野原で石に腰掛け酒盛りを始めた。

②足元に転がっていた一つの骸骨にも酒を注いだ

③再び同じ野を通った時、その野で死んだ娘の霊が酒盛りのお礼で声をかけた。

④その娘の法事に一緒に参加した爺は、今までの事を娘の親類に話した。

⑤親類は爺に連れられ骨を迎えに行き葬式をやり直し、爺はその家の情で安泰に暮らした。

旧版伝承地…陸中上閉伊郡

新版伝承地…岩手県上閉伊郡、『老嫗夜譚』佐々

木喜善

テーマ…死んだ人を助けることで恩恵を受ける

24 「金の斧銀の斧」旧×、新〇

①正直な木こりが、斧を池に落としてしまう。

②水の中から出てきたお爺さんが木こりの話をきいて、斧を取って来る。

③金の斧と銀の斧を持って出てきたが、自分の物は鉄の斧だと答える。

④正直に答えた褒美に、金の斧も銀の斧も木こりに与えた。

⑤隣の悪い爺さんがその話を知って、自分も金の斧銀の斧を貰おうと森に行く。

⑥欲の深い爺さんは金の斧を自分のものだと言い、水の中から出てきたお爺さんは怒った。

⑦嘘をついたため、金の斧も銀の斧も鉄の斧も貰えなかった。

新版伝承地…大分県直入郡久住町、『直入郡昔話』

鈴木清美

話 型…二二六 黄金の斧 A T 729

教 訓…正直であるほうが良い

25 「黄金小臼」旧〇、新〇

①百姓の兄弟の弟は小賢しく、愚かな兄をこき使っていた。

②ある日兄は沼から出てきた女の頼みで、他の沼にいとこの妹に手紙を届けに行った。

③いつも姉が世話になっているからと、妹は小臼を与える。

④その小臼は米一粒入れると黄金が一粒出てくる宝で、庭の池の水を朝晩供えるよう言った。

⑤兄が楽に暮らしているのを弟が怪しみ、兄の留守中に小臼を見つける。

⑥欲の深い弟はきまりを守らず黄金を沢山得ようと

し、小臼は庭の池へ転がりこんでしまった。

旧版伝承地…陸中江刺郡

新版伝承地…岩手県江刺郡、『江刺郡昔話』佐々

木喜善

話 型…二二五 沼神の手紙 A T 930, 910 K. M. O

t. K 978

教 訓…欲を出すと良いことにはならない

26 「はなたれ小僧様」旧〇、新〇

①薪を売っていた爺が、薪を川の淵へ投げ込み竜神様を拜んだ。

②竜神から正直に働く爺への褒美の子供を持って、淵から女が現れた。

③はなたれ小僧様というその子供は願いを何でも叶えるが、毎日海老の膾を供える必要がある。

④はなたれ小僧様のお蔭で見違える程金持ちになったが、膾を作ること面倒に思うようになる。

⑤爺はもう願いは無いから竜宮へ帰るようにはなたれ小僧様に言う。

⑥鼻を吸る音の後、残ったのは以前の貧しい家で、はなたれ小僧様の姿はもうどこにもなかった。

旧版伝承地…肥後玉名郡

新版伝承地…熊本県玉名郡、『旅と伝説』二一〇七

教訓…努力をせずに何かを得ることは出来ない

27 「蛇の息子」旧×、新〇

①子の居ない爺と婆は、蔵で見つけた蛇を飼うことにする。

②シドーと名づけた蛇は大きくなり、蔵に飼っておけなくなる。

③爺はシドーを根気よく飼えば楽に暮らせるという夢のお告げを信じ、飼い続ける。

④貧乏になりいよいよ飼えなくなったので、シドーは出ていった。

⑤神通川の船橋の近くに蛇が出て、退治した者には褒美にお金をやるというお布施が出る。

⑥その蛇はシドーで、爺と婆が説得すると蛇は礼をして川を下り海へ入った。

⑦お布施通り褒美を得た爺と婆は一生安泰に暮らした。

新版伝承地…山梨県西八代郡九一色村、『続甲斐

昔話集』土橋里木

註…この話の話者が、越中の葉売りから聞いた話だという

話型…一四二A 蛇息子A T 433 B

教訓…動物は恩を忘れない

28 「松子の伊勢参り」旧〇、新×

①伊勢の大神宮様へ出羽の村から若い男女がお参りに来ていたが、旅費が足りず困っていた。

②宿屋の主人は松子というその女に金を貸し、来年その村の誰かに持ってきてもらうことにする。

③翌年その村の者が来たが、その村に松子という女はいなかった。

④実は松子とはその村の神社の松の木の名前で、人の形となり伊勢参りをしていた。

旧版伝承地…羽後北秋田郡

話型…参宮松 B 296 D 431・2 D 432・1

テーマ…出羽の諏訪神社にある松の木

29 「水蜘蛛」旧〇、新〇

①奥州のある沼ではだしの足を沼に浸しながら釣りをしていった。

②一匹の水蜘蛛がその足の指に糸を引っかけてきたので、傍にあった柳の株に巻き付けた。

③沼から掛け声が聞こえ蜘蛛の糸が引っ張られ、太い株は根元から折れてしまった。

④誰もこの沼に釣りに行くものはいなくなった。教訓…半田山の沼では釣りをしてはいけない

旧版伝承地…岩代伊達郡

新版伝承地…福島県伊達郡

話 型…補遺三四 水蜘蛛 集成・六五九

30 「泥鼈の親方」旧〇、新×

①ある古池で捕った泥鼈を町の魚屋へ売りに行こうとすると、池からどこに行くと言われ、聞かされた。

②泥鼈が入った背中の籠からも声が聞こえ、明日には帰ると答えていた。

③男は驚くものの魚屋でその泥鼈を売り、その金は近くの寺に納めお経を読んでもらった。

④魚屋は、その泥鼈は刃物が無ければ破れない池洲から居なくなったと話した。

⑤男が捕まえた物と言う泥鼈は、泥鼈の頭だったのだろう。

旧版伝承地…美濃

話 型…本格新話型三九 物いう魚B 211. 5

テーマ…魚も物を言う

31 「やろか水」旧〇、新×

①雨続きで川の堤が切れてしまうのを恐れ村人は水番をしていた。

②川向かいの山の淵からやろうかあ、という声がしきりに聞こえた。

③不思議に思いながらも、一人がいこさばいこせえ

と答えた。

④忽ち水が押し寄せ辺りの田が水に浸かり、その洪水はやろか水と言うようになった。

旧版伝承地…尾張丹羽郡

テーマ…木曾川にまつわる洪水

32 「御苦労の池」旧〇、新×

①肥後の村の古池の水をさらえて、魚を捕ろうとした。

②いつまでも水は無くならず、漸く減ってきた頃一人の人が水から出てくる。

③その人が皆様御苦労と言ってお辞儀をすると、減っていた水は元通りになった。

④魚を捕ろうとするものはいなくなり、この池を御苦労の池と呼ぶようになった。

旧版伝承地…肥後玉名郡

教 訓…御苦労の池で魚を捕ろうとしてはいけない

い

33 「米良の上漆」旧〇、新×

①米良の山里に漆を売っていた兄弟がいた。

②ある日兄は川の淵の底に上等な漆が溜まっているのを見つけ、独り占めしていた。

③弟もその秘密を知りその漆を売るようになる

④兄は彫り物師に頼み、本物そっくりの大きな木の竜を作らせて、それを川に持っていく。

⑤弟はそれを怖い大蛇と思い逃げ帰り、兄はこれでまた漆を独り占めできると喜ぶ。

⑥しかし木の竜にはいつの間にか魂が入ってしまい、兄も淵の底に近づくことが出来なくなった。

話 型…一八一 米良の上漆AT945

テーマ…米良で採れる漆

教訓…独り占めしようとしても、いいことにはならない

34 「蟹淵と安長姫」旧〇、新×

①年取った樵が、手に持っていた斧を滝壺の淵に落としてしまう。

②淵に水煙が立ち辺りが暗くなり、美しいお姫様が出てくる。

③樵が落とした斧で、この淵に住み着いた悪い蟹の片腕が切り落とされ弱っているの礼を言う。

④とどめを刺して欲しいと、もう一度斧を落とすように頼まれる。

⑤水の神を助けたいと再び斧を滝壺の淵に落とすと、後日爪のない大きな蟹が死んで海に流れた。

⑥それ以来水の耐えなくなったその川を安長川、滝

壺を蟹淵と呼ぶようになり、この水神に雨乞いをする雨が降るといふ。

旧版伝承地…讃岐周吉郡

テーマ…安長川の水の恵み

35 「竜宮の鐘」旧〇、新×

①近江国の粟津冠者がお寺の釣鐘を鋳るために鉄を求め、船に乗り出雲へ向かう。

②船旅の途中で粟津冠者を竜宮からの遣いが迎えに来る。

③竜宮に攻め入ってくる大敵を、弓矢の達人である粟津冠者に倒してほしいと頼む。

④大きな大蛇を無事に倒し、そのお礼に竜宮にあった鐘を贈った。

⑤近江の広江寺の鐘は竜宮からのおみやげといわれるが、その寺は今は無く確かなことは分からない。

テーマ…竜宮から持ち帰った釣鐘

36 「山父のさとり」旧〇、新〇

①一人の桶屋が一つ目一本足の怪物に遭う。

②山父というその怪物は桶屋が思っていることを悟るので困っていた。

③恐怖と冬の寒さで手がかじかみ滑って、籬の竹の端が山父の顔を打った。

④山父は、人間が時に思っていないことをしでかすのを恐れて逃げていった。

旧版伝承地…阿波

新版伝承地…徳島県、『郷土研究』二ノ六

話 型…二六五 山姥と桶屋 A T 1135 ; A T 1137

テーマ…人間が怪物に仕返しをする

37 「飯食わぬ女房」旧〇、新〇

①一人の桶屋が善く働き飯を食わぬ嫁を貰ったが、米が減るのを不審に思っていた。

②その嫁は山母で、桶屋が居ないときに米とみそ汁

を頭の真中にある大きな口でたらふく食べていた

③それを知った桶屋が山母に出ていくよう頼むと、

山母は大きな桶を一つねだった。

④その桶の中に油断していた桶屋を突き落として山

奥へ向かう山母。

⑤何とか逃げ出した桶屋は追いかけて来る山母から

逃れようと、川原に茂る菖蒲と蓬の間に潜む。

⑥飛び込んできた山母の右目を菖蒲の葉が突き、左

目を蓬の茎が突いた。

⑦その日は五月五日で節句とし、このようなひどい

目に遭わぬように蓬と菖蒲を屋根に葺き、その葉

を入れた湯に浸かるようになった。

旧版伝承地…陸中胆沢郡

新版伝承地…岩手県胆沢郡、『胆沢郡昔話集』織

田秀雄

話 型…二四四 食わず女房 A T 1373 A

テーマ…人間が怪物に仕返しをする

38 「牛方と山姥」旧〇、新〇

①牛方が牛に塩鯖を積んで売りに行く途中で、山姥に遭う。

②山姥は牛に積んでいた塩鯖を食べつくし牛も食べ

てしまったので今度は牛方を食べようとする。

③牛方が走って逃げて行きついたのは山姥の家で、

天上に隠れた。

④牛方を追いかけてたびれた山姥は、帰ってくると

餅や甘酒を作るが居眠りをしてしまう。

⑤そのすきに牛方が餅や甘酒を食べると、目を覚ま

した山姥は誰が食べたどなる。

⑥牛方が火の神だと答えると、それなら仕方ないと

思った山姥は木の唐櫃の中に入り寝てしまった。

⑦牛方はその唐櫃に穴を開け熱い湯を注ぎこみ、響

を打った。

旧版伝承地…越後

新版伝承地…新潟県南蒲原郡、『越後三条南郷談』

外山曆郎

話 型…二四三 牛方山姥 A T 1121・M o t. G 513
テーマ…人間が怪物に仕返しをする

39 「人影花」旧×、新〇

- ① 子供の居ない貧乏な夫婦が居た。
- ② 夫が留守の間に盗賊が騙して妻を自分の家へ連れ帰った。
- ③ 三年妻を探し続けた夫は、老人から妻は盗賊の屋敷に居ると教えられる。
- ④ 妻と再会した夫はご馳走でもてなされ、盗賊の居ない間に名刀を手に空襲の中へ隠れた。
- ⑤ 帰ってきた盗賊は、アスナローという家の中に居る人数だけ咲く花を見て、家の中に誰かいると気づく。

- ⑥ 妻はお腹に子がいるからだろうと答え、喜んだ盗賊は祝杯をあげる。
- ⑦ 盗賊が酔いつぶれ、風呂に入った所で夫が出て来て斬り殺した。

- ⑧ 珍しいアスナローの花を王様に献上した夫婦は、盗賊の家から宝を持ち帰り大金持ちになった。

新版伝承地…鹿児島県大島郡喜界島、『喜界島昔話集』岩倉市郎

話 型…二六 人影花 M o t. D 1310, cf. 760

テーマ…悪人に仕返しをする

40 「天道さん金ん綱」旧〇、新〇

- ① 母と三子あって、母が寺に参る間、山姥が母に化けて帰ってきた。
- ② 末子が食べられ、山姥だと気付くと二人は山姥を騙して逃げ、庭の桃木に上った。
- ③ 上り方を尋ねられると長子は油を塗って上ったと騙すが、山姥の様子を嘲った次子が上り方を教えてしまう。
- ④ 子らは慌てて空に「天道さん金ん綱」と呼ぶと、天から鎖が降りてきてそれを掴んで天に上る。
- ⑤ 山姥も同様にするが腐った縄が降り、それに掴まり上ろうとするも高所から蕎麦畑に転落死してしまふ。
- ⑥ 山姥が頭を打った時に流した血で蕎麦の茎が赤く染まって以来、蕎麦の茎は真赤になった。

旧版伝承地…肥後天草郡

新版伝承地…熊本県天草郡、『日本伝説集』高木敏雄

テーマ…蕎麦の茎の色について
備考…山姥

41 「鬼と神力坊」旧〇、新×

① 阪本八幡神力坊という山伏の家に、よく秩父の山の鬼が来た。

② 鬼の振る舞いに困った彼は、懲りて来ぬよう画策し、村の人にも指示をした。

③ 来た鬼には酒の肴に角切りの石と竹の根の輪切りを出し、彼は豆腐と筍を食った。

④ 酒の肴が食えぬ鬼に、「人間は何でも噛める」と言う。

⑤ 地面をひっくり返す事も皮を剥ぐ事も出来ると言つて案内すると、畑の麦が村人によつて刈り取られ、半分が鋤返されている。

⑥ これを見た鬼は人間の所では威張れぬと思い、以来その村には鬼は来ていない。

旧版伝承地…武蔵秩父郡

テーマ…鬼が来なくなった理由

42 「金剛院と狐」旧〇、新×

① 金剛院という修験者は狐の昼寝を見つけるや耳元で法螺貝を吹いて驚かす。

② 狐は復讐を企て、町の寄合に向かう道中の山伏に、わざと金剛院に化け見せた。

③ 山伏らは狐に化かされると思い待ち構え、何も知

らぬ金剛院が寄合に出る。

④ 金剛院を叩きつ縛りつしていると、金剛院は自分が狐だと思われている事に気づいた。

⑤ 狐でない事を証明し解放された金剛院は仕返しだと気づき、以来昼寝する狐に法螺貝を吹かぬようになった。

旧版伝承地…紀州西牟婁郡

テーマ…昼寝の狐に法螺貝を吹くことについて
教訓…悪戯と報復の応酬

備考…化け狐

43 「山梨の実」旧×、新〇

① 死にかけの母は三人の娘に最後の願いとして山梨の実を所望し、嫁御の言う通りに行けと教えた。

② 長子は嫁御の言う通り道を往復し続けるが、耐え兼ねて無視すると嫁御に食われ、次子も同様になる。

③ 末娘は言う事を聞き、山梨の実へ辿り着き、遂に母親に食べさせ、元気になった母親と幸せに暮らす。

新版伝承地…岩手県一関市、菅原多喜子採集

教訓…親を大事にすることと親の言うことを聞くこと

備考…食人種

44 「三枚のお札」旧×、新○

①和尚に命ぜられ小僧が杉葉拾いをしてると叔母だという女が手伝い、今度自分の家に来るよう言った。

②和尚は山姥だと言ったが、行くという小僧に三枚の札を渡した。

③山姥は訪ねてきた小僧を寝かし包丁を研いでると、小僧は気づき逃げる為に、便所に行きたいと言う。

④便所で「もういいか」「まあだ」という問答を札に任せて逃げるも気づかれて追いかけられる。

⑤残りの二枚を使い大河や大山を出して寺に逃げ、経文の箱に隠れた。山姥は経文に触れず悔しがる。

⑥和尚は化け比べで山姥を味噌に化けさせ、食べるが腹で暴れる為節分豆を食い放屁共々出し飛ばした。

新版伝承地…秋田県鹿角郡宮川村「現鹿角市」、『昔話研究』一ノ二

教訓…人の忠告は聞くものだということ
備考…山姥

45 「古箕にふるしき、古太鼓」旧×、新○

①村人に止められながら、化け物が出る噂があるため住職のいない荒寺で旅の若者が一晩宿を借りた。

②夜中頃に大きな音を立てて太鼓やふるしき、箕やさわちが出てきて歌や踊りを始めた。

③朝になるとそれらは逃げ隠れ、若者は、古いものが踊ってただけだと村人に告げて旅立った。

新版伝承地…新潟県佐渡郡畑野村、丸山久子採集
テーマ…寺の噂の正体

教訓…百聞は一見に如かず
備考…付喪神(?)

46 「俄か入道」旧○、新○

①ある村で狐が悪戯をしていた時、自分は騙されたと威張っている人がいた。

②その人は村の川原で狐が女に化けているのを見た。

③化かそうという積りだと思いきを投げると、藻で作った赤ん坊に直撃した。

④女は死んだと喚くばかりで狐に戻らないので男は勘違いしたと思う。

⑤詫びのために出家すると言って寺に向い、和尚に

頭を剃ってもらった。

⑥ 気づくと女も和尚も寺もなくなって、髪は狐に食いちぎられていた。

旧版伝承地…武蔵

新版伝承地…埼玉県秩父郡、『秩父槻川村誌』

テーマ…人を化かす狐について

教訓…騙されないと高を括っている人ほど騙されやすいものはないということ、怪しいものに自ら足を入れるなどということ

備考…化け狐

47 「小僧と狐」旧〇、新〇

① 寺にずいてんという小僧が留守居をしていると、ずいてん、ずいてんと呼ぶ声があった。

② 確認すると、戸の前に立つ狐の尻尾が戸をこする音が「ずい」、頭をぶつける音が「てん」とするのだった。

③ 彼は狐が頭をぶつけるのと同時に戸を開き、狐を庫裡の庭に転げて彼は狐を追回した。

④ 狐の姿を見失ったが、代わりに本堂の本尊が二つになっている。

⑤ 彼がうちの本尊は舌を出すというから狐の本尊はそのようにした。

⑥ 同様に騙し、狐を庫裡の大釜に入れ、和尚が帰ってくる迄に狐の丸煮を拵えた。

旧版伝承地…羽前

新版伝承地…山形県最上郡豊里村「現鮭川村」、『羽

前豊里村誌』

テーマ…騙された狐

備考…化け狐

48 「片目の爺」旧〇、新〇

① ある田舎に爺と婆がおり、爺は片目だった。

② 爺が帰ってくると右片目の爺が左片目になっていた為婆はそれが狐だと気付いた。

③ 狐は婆にうまく誘導され、俵に入り、縄を掛けられ、燻されてしまった。

④ 本物の爺が帰ってくると俵の中の狐は狐汁になった。

旧版伝承地…陸中

新版伝承地…岩手県上閉伊郡土淵村「現遠野市」、

『老媪夜譚』佐々木喜善

テーマ…騙された狐

備考…化け狐

49 「たのきゆう」旧×、新〇

① 日没間近に旅役者のたのきゆうが母親の容態を聞

いて国へ戻る途次、うわばみが出る山にさしかかる。

②うわばみは名を狸と空耳したので化けをすることになり、別れ際にうわばみは嫌いなものを教えた。

③たのきゆうは山を下りて退治方法を告げると、村人が退治に勇んでいる事が耳に入り、山から逃げた。

④狸がばらしたんだと思い、たのきゆうの家を探して、嫌がらせに嫌いと言った小判を投げ込んだ。

新版伝承地…高知県高岡郡東津野村、『土佐昔話集』桂井和雄

テーマ…自滅するうわばみ

教訓…自分の弱点を軽々しく口にしては足元を掬われるということ

50 「化けくらべ」旧×、新○

①狐のお花と狸の権兵衛は化けるのが上手だったので権兵衛は化けくらべを申し出た。

②明晩にお花は美しい花嫁に化けて行くと湯気を立てた饅頭が落ちており、拾って食べようとした。

③すると饅頭に化けた権兵衛が「お花さん、勝ったぞ」といって狐のお花も狸に化かされてしまった。

新版伝承地…福島県平市、『磐城昔話集』岩崎敏

夫

テーマ…狸と狐の化かし合い

教訓…自分より優れたものが存在するということ

備考…化け狸、化け狐

51 「猫と狩人」旧×、新○

①狩人は一匹の猫を大事に育てており、猫が二十年長生きして体も大きくなると悪戯をするようになった。

②肴を盗む猫を狩人の妻が叱ったので、猫は仇討ちをしようと考え、狩人が作った鉛球の個数を数えた。

③狩りでは珍しい獣がおり、それには十三発とも当たらないので困ったが、守り玉で撃ち殺した。

④獣は家の猫で十三発は茶釜の蓋で防いだが最後のは数えた分でなかったので防げず死んでしまった。

新版伝承地…山梨県西八代郡九一色村、『甲斐昔話集』土橋里木

テーマ…仇討ちしようとした猫の末路

教訓…不誠実な復讐はかえって身を滅ぼすということ

備 考…猫（猫又カ）

52 「比治山の狐」旧〇、新〇

- ① 広島にある能役者がおり、風よけに能面を被っていると狐に声を掛けられた。
- ② 狐は面を譲ってほしいと頼むので、譲ってしまった。

③ 狐は殿様が狩りに来た前へ面を被って出るも、殿様たちに殺されてしまった。

テーマ…人間になりたかった狐

教 訓…上面だけ繕ってもその人にはなれないということ

53 「芝右衛門狸」旧〇、新〇

① 芝右衛門狸と禿狸が化け比べをして、禿狸は殿様の渡海の様子に化けた。

② 芝右衛門狸は感心し、自分も後日大名行列の様子に化けると約束した。

③ 後日に禿狸はその様子を褒めるが、それは本物の大名行列であった。

④ 禿狸の様子を見て嘲弄されていると思った殿様は槍を投げて突き落としてしまった。

旧版伝承地…淡路

テーマ…狸と狸の化かし合い

備 考…化け狸

54 「山伏の狸退治」旧〇、新×

① 狸の悪戯である家から毎日道具がなくなり、祈祷も効き目がなく山伏らも困っていた。

② 最後に来た山伏は自分なら退治れると言い、祈祷に必要な物を買に行く。

③ 皆は山伏の忘れ物に気づき、伝えようとも届かず、その間にその小包は無くなっていった。

④ 帰ってきた山伏にそれを告げるが、笑って、皆と家を探し始めると縁下に狸が死んでいた。

⑤ 山伏はわざと包みを忘れ、狸にまちないりの握り飯を食わせたのだという。

旧版伝承地…磐城石城郡

テーマ…狸退治

教 訓…盗みは自分に不幸をもたらすということ
備 考…化け狸

55 「湊の杣」旧〇、新〇

① 湊で杣に化けて船頭たちのつないだ舟を流してしまいう狸がいた。

② 土地の人たちは退治しようと、或晩、舟に縄や棒を隠して乗り、杣を探すふりをした。

③ 気づくと杣が出ていて彼らは知らん振りして過ぎ

ようとすると「くい、くい」と言う。

④その杵に長い縄でつなぎ棒でその杵を打ち、化けの皮がはがれた狸は退治られた。

旧版伝承地…三河幡豆郡

新版伝承地…愛知県幡豆郡

テーマ…狸退治

教訓…騙すという行為は自分の身の為によくないということ

備考…化け狐

56 「狐が笑う」旧〇、新×

①ある茶屋に喜兵衛の夫婦が住んでおり、夜遅くそこへ旅の武士がやってきた。

②武士は狐が化したもので身形許立派でも毛や顔などが不十分であった。

③よく化けたと威張る狐に、盃一杯の水を出すとそれに映った顔に驚いて逃げてしまった。

④翌日喜兵衛が山へ行くと「喜兵衛さん昨晩はおかしかったな」と聞こえ、それに気づいた。

テーマ…狐も正直者で人と仲良くなれたということ

備考…化け狐

57 「味噌買橋」旧×、新〇

①長吉は、老人が枕元で高山の味噌買橋に行けばいいことがあると言う夢を見た。

②商売がてら味噌買橋に行き、何日も立っていたが何も起きない。

③豆腐屋が、自分も長吉という人の家の木の下に宝があるという夢を見たが、夢なので疑わしいと言う。

④長吉が家の傍の杉木の根元を掘ると宝が出てきて、長者となり、福徳長者と呼ばれたとか。

新版伝承地…岐阜県大野郡高山町「現高山市」、『続飛騨探訪日記』沢田四郎

テーマ…貧乏人の成り上がり

註…柳田「昔話覚書」の解説と、沢田四郎の調査（民間伝承四ノ七味噌買橋後聞）の解説。

備考…夢買い

58 「夢を見た息子」旧×、新〇

①のら息子はいい夢を見たがそれを誰にも話そうとしないので追われていると鬼婆の家についた。

②鬼婆は空を飛べるうちわと引き換えに聞かせると言うが、試してからと言ってそのまま空へ逃げた。

③鯨の背に降り、鯨も殺す針と生き返す針を引き換

えにというが、試してからと殺す針で射して逃げた。

④町では死者を蘇生できると触れ回り、殿に召され、死んだ姫を生き返すと褒美を貰い両親と暮らす。

新版伝承地…秋田県仙北郡荒川村水沢「現大仙市」、『秋田郡邑魚譚』武藤鉄城

テーマ…貧乏人の成り上がり

備 考…山姥、大鯨、豪族、夢買い

59 「寝太郎三助」旧×、新○

①朝から晩まで寝てばかりの寝太郎三助という男が早朝に山へ行き、晩に雉を捕まえて戻ってきた。

②部屋に閉じこもると翌夕方に出かけ庄屋の家の樫木の上って庄屋の源左衛門を待った。

③源左衛門が帰宅すると木の上から三助を婿にしると言って提灯を付けた雉を西方へ飛ばした。

④これを出雲の神のお告げと勘違いして三助を娘のおみよの婿にすると、三助は安泰に寝て暮らした。

新版伝承地…広島県高田郡、『安芸国昔話集』磯貝勇

テーマ…三助の一念発起

教 訓…何かを仕遂げるには、現状から一念発起して事を為さねばならないということ

備 考…神託

60 「夢を買った三弥大尽」旧○、新×

①三弥という貧乏商人が途次に仲間と休んでいると寝てる仲間の鼻から蜂が出て、また帰ってきて何かへ飛び去るといふ光景をみた。

②仲間は起きると、山の一谷が金で一杯になっている夢を見たという。

③三弥は男に好きなものを遣り、その夢を買うと一人で山を探し回り、遂に金山を発見した。

④三弥は九州一の大金になるが、三弥が死ぬとこの金山も沼と化した。

旧版伝承地…日向西臼杵郡

テーマ…貧乏人の成り上がり

備 考…夢買い

61 「蝮島の虻」旧○、新×

①ある男が鯖釣りをしていると、寝ている若者の鼻を三匹の虻が出入りしている様子を見た。

②若者を起こすと、御堂から出て虻になり飛んでいく三匹の仏を見届ける夢を見たという。

③男は釣った鯖と引き換えに若者から夢を買ひ、御堂に行くと三匹の虻が飛んでいた。

④とって帰ると三匹の仏像で、阿弥陀仏を寺へ、弁

天を島へ、毘沙門は家で祀っている。

旧版伝承地…能登珠洲郡

テーマ…毘沙門、阿弥陀、弁財天を祀ることに
ついて

備考…毘沙門天、阿弥陀如来、弁財天、夢買い

62 「だんぶり長者」旧〇、新〇

①だんぶり長者には三千人の家来がいて、都に上つて長者の御印をお願いした。

②長者には天賦の宝がなくてはならず、証に後に貴人の妃となる美しい娘をご覧に入れた。

③この長者は元々百姓で、耕作の休みに昼寝していると蜻蛉が長者の顔の周りを飛び回る。

④妻はこれを起こすと、好い酒を飲んだ夢を見たという。

⑤二人で山陰に行き、見ると岩下より泉酒、同じ山からは金がとれ、忽ち金持ちになった。

旧版伝承地…陸中鹿角郡

新版伝承地…秋田県鹿角郡、『鹿角志』

テーマ…貧乏人の成り上がり

教訓…どんな財宝も子宝には及ばないということ

備考…夢見

63 「藁しべ長者」旧〇、新〇

【旧版】

①貧乏な男が観音に縋ると、寺を出て最初に入手した物を賜物と思えと夢でお告げを頂く。

②藁しべを入手し、賜物として持つていくと、途次それは蜜柑、反物、馬へと交換された。

③馬は最後、田と家に交換されて立派な農家になり、子孫繁栄して観音の御利益に感謝した。

【新版】

①貧乏人が大金持ちの娘に求婚すると、金持ちは藁しび一本を遣りこれで千万長者になれたら嫁にやるといふ。

②貧乏人がそれを持って出ると、芭蕉の葉に交換され、更に味噌一塊になり、剃刀になり、脇差になつた。

③殿様一行が通ると礼は望み通りにやるから脇差をくれという。遂に大金持ちになつて娘と結婚した。

新版伝承地…長崎県壱岐郡志原村「現壱岐市」、『壱岐島昔話集』山口麻太郎

テーマ…貧乏人の成り上がり
教訓…信仰心の重要さ

備考…夢見、神託

64 「炭焼小五郎」旧〇、新〇

①真野長者が炭焼小五郎だった頃、清水の観音のお告げを受けて都から美姫が嫁いできた。

②しかし家は貧しく二人も養えない為、美姫は小判二枚を渡して食べ物を買に行かせた。

③山麓の淵で鴛鴦二匹を見つけ、小判を投げ捕えようとすが逃げた為、小屋に戻った。

④姫に咎められ小判の価値を初めて知った小五郎は小屋裏の山に似た石があると案内する。

⑤一谷一杯に金があり、一人はそれの為に長者になつて、観音御堂をたて信心した。

新版伝承地…大分県臼杵市、『俚謡集』

テーマ…貧乏人の成り上がり

教訓…正直で勤勉たれということ

備考…神託

65 「二十騎が原」旧〇、新×

①ある長者の夫婦には子供が十人おり、皆逞しく育つて、野原で弓を射て遊んだ。

②長者はこの様子を大変喜ぶが、あと十人子供がいたらどんなに心丈夫かを妻に打明ける。

③妻は、実は全員双子で生まれて余り多いので余所で育てたと打明け、他の子も連れてきた。

④長者が死んでから二十の子らが遊んだ野原は二十騎が原、十の片割れを育てた谷は赤子沢と呼ばれた。

テーマ…野原と谷の名称の謂れ

教訓…子は宝だということ

66 「長者の宝くらべ」旧〇、新×

①米原の長者と駄原の長者がいて宝比べをすると、米原の長者は村から山鹿の茂賀浦まで金の飛び石敷いて来た。

②駄原の長者は子供二十四人を連れてくると米原の長者は羨ましいと申したので、そこは浦山の阪となつた。

テーマ…浦山の阪の謂れ

教訓…子は宝であるということ

67 「会津の鶴塚」旧〇、新×

①常安という長者がおり、沢山を持っていたが子供がおらず、鶴を子供として育てていた。

②しかし鶴は死んでしまい、長者夫婦は塚を築いて今でも鶴塚として残っている。

テーマ…鶴塚の謂れ

教訓…子は宝だということ

68 「湖山の池」旧〇、新×

① 千町歩の田を持つ湖山長者は慣わしにより、多くの田人早少女に一日中で田植えをさす。

② 田植中に、子猿を逆さに背負う母猿の姿を不思議に思つて全員が見たので作業が遅れた。

③ 自分の代に田植が二日かかつては名折れだと言ひ、金張りの扇で夕日を三べん仰ぎ返す。

④ 日は戻るも、この為だけに長者の威勢を試みた为天罰が下り、これを境に没落していった。

旧版伝承地…因幡気高郡

テーマ…長者の没落

教訓…濫りに権威・権力を振りかざしてはいけ
ないということ

備考…逆さ子猿、日招き

69 「梅木屋敷」旧〇、新×

① 助右衛門長者の家には、貧乏で家を売つても庭の梅木だけは売るなという教えがあつた。

② 遂に家を売らねばならなくなった時、教えを守り梅木を掘ると大判入りの甕が出てきた。

③ この為には家はまた繁昌したが、梅木が沢山ある事を安心して子孫は贅沢暮らしをした。

④ 再び貧乏になりかけた時、梅木を掘り返しても大

判は出ず、家はなくなり畠になった。

テーマ…長者の没落

教訓…何かに頼りすぎて怠慢を働いてはいけ
ないということ

備考…梅木の宝

70 「本取山」旧〇、新×

① 山奥に、膳や椀等が家ので足りない時、前の晩に頼むと貸してくれる洞穴があつた。

② 綺麗な椀の為欲深の人が借りて返さぬままにした
が、罰もなく金持ちになり子もできた。

③ ただ子は立つ事も出来ず、十になって米俵を掴ま
えて立つたと思つと、持つて歩き出した。

④ 後を追いかけると、遂に洞穴に入り、これで本は
とれたとの声が聞こえてから山を本取山というよ
うになった。

テーマ…物の貸し借りについて

教訓…受け取つたものには相応の対価が発生す
るということ、借りたものは返さねばならないと
いうこと

71 「金の椿」旧×、新〇

① ある短気の殿は宴会中に欠伸をした妻を島流しに
し、妻は島民に助けられつつ殿の子を産んで育て

た。

②男の子が母に自分に父がいけない訳を聞くのでそれを聞かすと父に会いに行った。

③椿を手折り、金の椿はいらんかと言うと、殿に呼出され、それが普通の椿なので不届き者と言われる。

④欠伸をしない人が植えれば咲くと言うが、殿がそんな人はいないと言うので母への仕打ちを指摘した。

⑤殿はそれによって非を悟り、三人で幸福に暮らした。

新版伝承地…福井県 『福井県郷土誌』第二民間伝承篇

テーマ…自身の過ちを顧みるということ

教訓…家族の大切さについて、反省について

72 「鶯姫」旧〇、新〇

①竹取の翁は竹林に入って光る鶯の卵を見つけ持ち帰ると、娘が生まれて鶯姫と名付けた。

②またかぐや姫とも呼ばれ、翁の取る竹の節々には金が詰まっており、長者になった。

③鶯姫には求婚者が訪れ、遂には天子までも求婚したが、これを辞退した。

④八月十五夜に雲の迎えが来て親子は天に上った。

⑤天子には和歌と不死薬を渡すが、これを山の上で焼かせてしまわれ、この煙を富士の煙といった。

新版出典…『海道記』

テーマ…富士の煙の謂れについて

備考…竹取物語、かぐや姫、女性主人公

73 「瓜子姫」旧〇、新〇

①婆が川で洗濯中、瓜が流れきて、持ち帰って割ってみると美姫が生まれ瓜子姫と名付けた。

②好い娘となって、その年の鎮守様の祭りに連れていこうと思ひ、爺婆は籠を買いに行った。

③留守中に天邪鬼が戸を開けさすと、姫を畑に連れて衣を剥ぎ、自分が姫に成り代わった。

④籠に乗せて参ろうとすると、本物の姫の声を聞き、天邪鬼を殺す。以来黍の茎は血で赤い。

旧版伝承地…出雲

新版伝承地…島根県、『日本伝説集』高木敏雄
テーマ…黍の茎の色の謂れ

教訓…親のいうことは聞かねばならないということ

備考…姫、女性主人公

74 「竹の子童子」旧×、新○

① 桶屋の小僧三吉が竹を取りに行くと、竹の中から出してくれと声がる。

② 出てきたのは五寸程の天人で恩返しに七つだけ好きな事をしてやるという。

③ 三吉は教えられた呪文を唱えると、前からなりたかった侍になり、礼を言って武者修行にでた。

新版伝承地…熊本県球磨郡、『昔話研究』一ノ八
テーマ…願いをかなえる天人

教訓…人助けをするとよいことがあるということ

備考…竹取物語

75 「米囊粟囊」旧○、新○

① 米袋には妹と継母があり、継母は妹の粟袋可愛がり、米袋には底抜きのこだすを持たせて粟拾いに行かせた。

② 粟を拾えず途方に暮れると、母だったという白い小鳥がきて小袖・笛・こだすを渡した。

③ 継母は米袋に仕事を言いつけ、粟袋に好い着物を着せて祭りに出かける。

④ 友達の手伝いの為仕事を終えたので小袖を着て祭りに行き、二人が帰る前に帰ってきた。

⑤ 翌日米袋が粟袋と器量を競って勝ち、嫁に行く

粟袋もというので継母は触れて歩くが、荷車が転がって田に落ちた粟袋は田螺に、継母は堰具になつた。

旧版伝承地…津軽七ツ石

新版伝承地…青森県西津軽郡鰺ヶ沢町七ツ石、『津軽口碑集』内田邦彦

テーマ…立場の変化
教訓…自分たちの行いは自分たちに返ってくる

ということ
備考…継子物語、女性主人公

76 「山姥の宝蓑」旧○、新○

① 山で迷子になった娘は人家と違っていくと山姥の家だったが、泊めてほしいと頼んだ。

② 山姥は断るも娘を憐れみ、何にでもなれて何でも出てくる蓑をあげると、それを着て夜の山を彷徨う。

③ 途次、鬼がいたので老婆になって切り抜け、遂に情深い長者の家の長屋においてもらった。

④ 長者の息子が元の娘の姿を見た為、全てを話す事になり、村にも戻り、その息子と結婚して両家は繁栄した。

旧版伝承地…甲斐

新版伝承地…山梨県、『国民童話』石井研堂

備考…山姥、女性主人公

77 「姥皮」旧×、新〇

①父様は日照りで田が上がっているのに悩んでいた
ので、沼辺を歩きながら水をかけてくれたら三人
娘の内の一人を嫁にやるのにと独り言ちた。

②翌朝田には水がかかっていたが娘を沼の主へ嫁に
やらねばと思いい心配していると末娘が行く事にな
る。

③末娘は水とり玉・火とり玉・針千本を持ち沼に行
くとそれらで水を抜き、沼の主を刺し、すべてを
燃やしてしまった。

④蛙が声を掛けてきたので自分を使つてくれる所が
ないか尋ねると、姥皮をやつて村の方へ案内する。

⑤姥皮を着た娘は老婆になり大きい家の旦那様に雇
われるようになった。

⑥夜毎に姥皮を脱いだ姿を若旦那に見られ、若旦那
は狐狸の類ではないかと心配し、寝込んでしまう。

⑦誰が膳を出しても見向きもしないが、元の姿で娘
が行くと娘を慕つてたのがわかり、元気になった
若旦那と結婚した。

新版伝承地…岩手県二戸郡福岡町、佐藤良裕採集
備考…女性主人公

78 「絵姿女房」旧×、新〇

①島一番の貧乏な若者の許へ美女がやってきて妻に
なるという。

②この美女が荒地を拓いたり家を建てたりなどして
若者は大金持ちになった。

③若者は美女の顔をずっと見ておく為に姿絵をもつ
て畑に出たが、飛ばされて殿様の所迄行ってしま
う。

④殿様はお互いに相撲取りを立てて勝ったら美女を
よこし、負けたら五百両やると命令した。

⑤若者は美女の連れてきた老爺二人を立てて見事勝
つと五百両もらい受け百両ずつ老爺に渡す。

⑥突然に妻が暇を申し出たので、嘆くと美女は掴ま
れた片手だけを残していつてしまった。

⑦翌日後ろの神社の男神二体は百両ずつ持ち、女神
は片腕がないというのを聞いて今までの出来事が
神の起こしたことだと分かり、腕を返して拜んだ。
これは男が正直者だった故の神の慈悲だったとい
う。

新版伝承地…鹿児島県奄美大島名瀬「現奄美市」

『昔話研究』二ノ七

テーマ…正直者への恩恵、貧乏人の成り上がり

教訓…正直で勤勉たれということ

備考…男神、女神

79 「竈神の起こり」旧〇、新〇

①百姓が道祿神の森陰で雨宿りをしている所、本家に生まれた男子に運がない事、分家の女子に福分があつて夫婦になるとよいというのを聞く。

②男子は自分の家に生まれた子の事で分家の方と縁組の取り組みをしてから、夫婦になると妻の運で繁昌した。

③男は妻の運のお陰だと知らないまま追い出してしまつと、一軒家の妻になりその家は繁昌した。

④男は零落して笹売りになり元妻の家に売りにいくと、顔を忘れたのかと言われたので思い出し驚きで死んだ。

⑤死骸を竈の裏に埋めて牡丹餅を供えると、下女達等に荒神を祀つて牡丹餅を供えたので食べるようになったところから竈の神の祭りがされるようになった。

旧版伝承地…上総長生郡

新版伝承地…千葉県長生郡、『南総乃俚俗』内田

邦彦

テーマ…竈の神へのお供への由来

教訓…親類は大事にしなければならぬということ

備考…運定め、女の福分

80 「寄木の神様」旧×、新〇

①釣りの好きな漁夫が、朝方釣りに出掛けたが早かったので潮待ちをしていた。

②寄木を枕にうとうとしていると不思議な会話が聞こえた。

③釣りをして家に帰ると女の子が生まれており、砂浜での寄木たちの会話を思い出したが誰にも言わなかった。

④女の子が十八になった年、隣村へ嫁入りすることになった。

⑤父親は寄木の話の思い出し蓑笠の用意をし、嫁入りについていった。

⑥途中で俄雨が降りだしたが、父親は岩陰で雨宿りしようとする娘を引き留め急がせて、無事隣村についた。

⑦翌朝帰っていると娘が雨宿りしようとした岩は崩れ落ちていた。

⑧娘は父親のおかげで命拾いし、七つの倉を立てるほどの幸せな暮らしを送った。

新版伝承地…鹿児島県奄美大島 長田須磨子採集

註（語釈）…イヤギサシとは奄美群島で使われている言葉で、運命を授けるという意味である。子どもが生れると神さまがその子の一生の運を定めると信ぜられている。

テーマ…神のお告げ

81 「矢村の弥助」旧〇、新〇

①信州の矢村に住む弥助という農民の家は貧しかった。

②正月の買い物に行く途中畏にかかった山鳥を見つ
け、逃がして代わりに正月支度用の金をすべて挟
んでおいた。

③親子二人で何もない寂しい正月を送っていると、
若い娘が春までおいてほしいとやってきた。

④親も身寄りもないならこの家で嫁になってほしい
と弥助の母が相談すると、喜んで嫁になった。

⑤数年後、弥助は弓が上手だったため田村將軍のお
供として有明山の鬼退治に行くことになった。

⑥弥助の女房が弥助を呼んで、あなたに命を助けて
もらった山鳥だということ、有明山の鬼を倒すた

めに十三の節ある山鳥の尾羽根を使って作った矢
を使うといいこと、自分の羽を使えばいいことを
言って飛んで行った。

⑦弥助は有明山の鬼を退治した手柄によって莫大な
褒美をもらい、信州にその名を残し続けた。

旧版伝承地…信州安曇郡

新版伝承地…長野県南安曇郡、『南安曇郡史』

テーマ…恩返し、異類女房

82 「狐女房」旧〇、新〇

①能間国の万行の三郎兵衛は、ある晩便所から帰る
と部屋に自分の女房が二人いた。

②どちらか一方は化物だが、姿に違いはなく難題を
かけてもすらすら答えるので困ってしまった。

③そのうち一人の方にほんの僅かな疑いがあつたた
め、それを追い出してもう一人を家に置いた。

④それから家が繁昌して、二人の男の子が生まれた。

⑤二人の子と母親が遊んでいるとき、母親に尻尾が
あることに気付いた。

⑥正体を見られたからには一緒にいることができな
い、自分は狐だったと言って二人の子を残して
帰っていった。

⑦それから毎年稲の実るころに狐は「穂にいで

つっぱらめ」と唱えながら歩いた。

⑧毛見の役人が来るときには稲に少しも実がないので年貢を許され、家に運ぶと後からどこよりもよく実ったのでこの家の暮らしは豊かになった。

旧版伝承地…能登鹿島郡

新版伝承地…石川県鹿島郡、『鹿島郡誌』

テーマ…稲荷神、異類女房

83 「蛙女房」旧×、新〇

①息子と婆が二人で暮らしていた。

②息子が山へ行くと蛇が蛙を飲もうとしていたので、蛇を殺して蛙を助けた。

③ある日の夕方美しい娘が訪ねてきて、嫁にしてほしいと頼んだ。

④嫁は働き者だったが、何も食べることがなく庭の池の水をなめるだけだった。

⑤ある日嫁が家の法事に行きたいというので許し、息子が後をつけると嫁は山奥へ入っていき大きな池に飛び込んだ。

⑥息子は嫁が蛙だと気づいた。

⑦蛙の法事の様子がおかしくなった息子が池に大きな石を投げ込んだので蛙は池の外へ逃げてしまった。

⑧帰ってきた嫁は婆に法事のことを話した後、どこかへ行ってしまった。

新版伝承地…新潟県佐渡郡畑野村、丸山久子採集

テーマ…異類女房

84 「蛇の玉」旧×、新〇

①近江の国の三井寺に毎日お参りに来て必ず茶店で休んでいく、若く美しい女がいた。

②近所の酒屋の息子が嫁にしたいと思ひ、話をしてくれるよう茶店の婆に頼んだ。

③婆が女に話をすると、女は了承した。

④女は子供ができ蔵で寝起きをはじめ、お産の間は決して蔵を覗かないように言った。

⑤息子は蔵を覗いてしまい大蛇が横たわり子供を抱いているのを見た。

⑥蛇はもうここにはいられない、子供には父の代わりに自分の目の玉を置いていくのでしやぶらせてほしい、何か用があれば湖の岸に来て呼ぶようにと言ってさっていった。

⑦子供は目の玉をしやぶって育っていたが、殿様が取り上げてしまった。

⑧酒屋は女を呼びもう一つの目の玉をもらった。

⑨蛇は子供が大きくなったら三井寺の鐘付きにして

ほしいと望み水の中に姿を消した。

⑩子供は無事成長し、三井寺の鐘付きになった。

新版伝承地…福島県平市、『磐城昔話集』岩崎敏夫

テーマ…母の愛情、異類女房

85 「盲の水の神」旧〇、新×

①肥前の深江に母と二人で住んでいる若い医者がい
た。

②村の子どもが白い鰻を捕まえて殺そうとしている
のを助けると、若い娘としてやってきて医者
の嫁
になり一人の男の子ができた。

③ある時姑に、蛇の姿を見られもしよい母乳がなく
子どもが育たなければ普賢岳の池の岸に来て自分
を呼ぶように言つて去つていった。

④父親が育てていたが乳が足りず女の所へ行くと、
女は乳の代わりに嘗めさせると子どもが丈夫に育
つと目の玉を男に渡した。

⑤帰り道で役人が男から玉を取り上げて殿さまに献
上した。

⑥翌日男はまた女のもとへ行き目の玉をもらった。

⑦もらった玉をまた役人に取り上げられてしまつ
た。

⑧普賢岳の大蛇はこれを恨み寛政年間の島原の大地
震大津波を起こしたという人もいるがもつと大昔
の話ともいわれている。

旧版伝承地…肥前南高来郡

テーマ…母の愛情、異類女房

86 「爺に金」旧〇、新〇

①ある村に善い爺と悪い爺がいた。

②善い爺が山に入って仕事をしていると、取つつか
うかくつつかと声がかと聞こえた。

③善い爺が何心なく取つつかば取つつか、くつつか
ばくつつかという金と銀が飛んできて肩や背中
に乗った。

④帰つて家の中で広げていると、悪い爺がやってき
て羨んだ。

⑤翌日真似をして宝物を得ようと悪い爺は山へ行つ
た。

⑥くつつかばくつつか取つつかば取つつかといつて
背中を出すと松脂が飛んできて肩と背中につい
た。

⑦家に帰つて婆に燈火をつけさせた爺は、火が松脂
に移つて大やけどをした。

新版伝承地…和歌山県有田郡、『有田童話集』森

口清一

テーマ…善と悪

教訓…人の真似はするべきではない

87 「大歳の焚き火」旧〇、新〇（「大歳のたき火」）

- ①ある田舎に貧乏な一人の馬方がいた。
- ②翌日は元旦だが一つも為事がなく空の馬を牽いて帰っていると街道の松並木の蔭に乞食を見つけ

た。

③助けてやろうと荷鞍のうえにのせて家に帰った。

④土間に敷いた筵の上に寝かせ、地路の火をうんと

焚いて年を越した。

⑤翌日、日が高く昇っても乞食が起きずかけていた

藁の筵をはぐと乞食だと思っていたのは黄金の塊

だった。

⑥それを使って馬方はすぐに大金持ちになった。

旧版伝承地…三河南設楽郡

新版伝承地…愛知県南設楽郡、『旅と伝説』四ノ

四

テーマ…人助け

教訓…情けは人の為ならず

88 「ものいう墓」旧×、新〇

- ①爺が蛇にのまれそうな墓を助けた。

②墓は自分を町に連れて行き唄を歌わせて金もうけ

するように爺に言った。

③爺は墓を町に連れて行き、大金を得た。

④隣の悪い爺が自分も金儲けしようと思理に墓を借

りて町へ行った。

⑤墓は歌わず、見物人は怒って悪い爺をひどい目に

合わせた。

⑥悪い爺は怒って蛙を殺した。

⑦善い爺は話を聞き墓の肉を半分もらい縁先に埋め

ると一晩でかつらの木が生え金のなる音がした。

⑧翌朝戸を開けると金銀が山のように積んであ

った。

⑨悪い爺も真似して縁先に埋めた所、翌朝家の周り

には牛糞が落ちていた。

新版伝承地…熊本県天草郡、『郷土研究』五ノ四

テーマ…善と悪

教訓…情けは人の為ならず、人の真似はするべ

きでない

89 「笠地蔵」旧〇、新〇

- ①ある村に心の善い爺と婆が住んでいた。
- ②翌日は正月という日に笠を売りに出たが少しも売

れなかった。

③ 笠を背負って帰っているとひどい吹雪の中で濡れている地蔵様を見つけた。

④ 爺は気の毒に思い六つあった笠を六つの地蔵様に着せて家に帰った。

⑤ 婆に話をしてそのまま寝た。

⑥ 年越しの夜明けに遠くから櫓を曳く音がし、歌が聞こえた。

⑦ 戸の口に宝物の袋を投げ込んで置いて六人の地蔵様は帰っていった。

新版伝承地…岩手県江刺郡、『江刺郡昔話』佐々木喜善

話 型…M o t. D 435. 1. 1

テーマ…人助け

教訓…情けは人の為ならず

90 「銭の化物」旧×、新○

① 毎日あくせく働くが楽な暮らしができない爺と婆がいた。

② 年の瀬に来年こそは福をさずかりたいと誰よりも先に氏神様の社へ行った。

③ 柏手を打ち拝んでいると神様の声が聞こえた。

④ 今夜家の前を通る行列の先頭の者をたたくように言われ爺は帰った。

⑤ 一番目二番目の行列は怖くてたたけなかった。

⑥ 三番目をたたくと一文銭が二・三枚落ちただけだった。

⑦ もう一度氏神様のもとへ行くと、一番目・二番目を叩けば金持ちになれたが三番目を叩くからいけない、福運が向いてないので金持ちになるのはあきらめるように言われた。

新版伝承地…鳥取県日野郡江尾村〔現江府町〕、池田弘子採集

テーマ…神のお告げ、笑い話

91 「見るなの座敷」旧×、新○

① 善い爺が山で木を切っていると、姫が木を切らないでほしいと頼み爺を家に案内した。

② 酒や肴を御馳走になり奥の方へ案内された。

③ 奥には一月から一二月までの部屋があり姫が町へ行っている間二月以外ならどこを見てもいいと言われた。

④ 善い爺は二月の部屋は見ずに待っていた。

⑤ 姫が帰ってきて何でも炊ける籠をもらった。

⑥ 悪い婆は話を聞き悪い爺を山へやった。

⑦ 悪い爺は言いつけを守らず二月の部屋を見た。

⑧ 鶯がいて一声鳴くと元の山の木の下にいた。

新版伝承地…青森県三戸郡五戸町、『てつきり姉妹』能田多代子

話 型…A T 480, 710

テーマ…善と悪

教 訓…言いつけは守るべき

備 考…異境

92 「鼠の浄土」旧×、新〇

① 爺が芝刈りに行ったので婆が団子を作って持って行った。

② 婆が転んで団子が転がり落ち穴に入った。

③ 穴から歌が聞こえるので覗くとネズミが臼を搗いていた。

④ 婆が猫の鳴きまねをするとネズミが逃げて行ったので婆は宝物を持って帰った。

⑤ 隣の欲深い爺と婆も真似をしたが、ネズミは逃げずこの前の慾婆だといひ婆を臼でひき殺した。

新版伝承地…福岡県企救郡、稿本『福岡県昔話集』

テーマ…善と悪

教 訓…人の真似はするべきでない

備 考…おむすびころりん、異境

93 「かくれ里」旧×、新〇

① 喜界島の志戸桶の天神拍の渚にある大きな岩に牛

をつなぎに来る男がいた。

② 眠いのでぐっすり寝て目を覚ますと、たくさんの蟻が牛をひき倒し大岩に引きこもっていた。

③ 男は綱を引いたが牛と一緒に穴の中に引き込まれた。

④ 穴の中は大きな原で畠もあった。

⑤ そこにいた男があなたのお金のおかげで畑を耕せたといってお金をくれた。

⑥ 誰にも言わない代わりにお金がいるときはいつでも取りに来るよう言った。

⑦ お金に不自由しなくなると男は友人に話してしまった。

⑧ 友人と岩に行ったが穴の口は開かず、男は貧乏になった。

新版伝承地…鹿児島県大島郡喜界島、『喜界島昔話集』岩倉市郎

テーマ…成功からの転落

教 訓…言いつけは守るべき

備 考…異境

94 「団子浄土」旧〇、新〇

① あるところに爺と婆がいて春の彼岸に団子をこしらえていた。

②一つの団子が庭に落ち転がっていったのを爺が追いかけていくと、穴に落ちていった。

③爺も穴に入ると地蔵さんが立っており、泥の付いた方を自分が食べ泥の付いていない方を地蔵さんにあげた。

④暗くなつて帰ろうとすると地蔵さんに呼び止められ言われるままに頭の上に乗った。

⑤鬼共が来るので扇をたたいて鶏の鳴きまねをしるといわれるので、言われるままにすると鬼共は銭や金を残して逃げた。

⑥爺は銭や金を地蔵さんにもらつて帰った。

⑦話を聞いた隣の婆も真似をしようと爺とべちゃべちゃの団子を作り無理やり転がし穴に入った。

⑧きれいな所を自分で食べ汚いところを地蔵にやつた爺は勝手に地蔵さんの頭に乗り勝手に扇を取り鬼共の前で鶏の鳴きまねをした。

⑨一匹の小鬼の失態を笑つた爺は鬼共に気付かれ、ひどい目にあわされた。

旧版伝承地…羽前最上郡

新版伝承地…山形県最上郡

テーマ…善と悪

教訓…人の真似はするものではない

備考…異境

95 「風の神と子供」旧×、新〇

①村のお堂で子供が遊んでいると見たことも無い人が風を吹かせて子供たちを栗や柿や梨の木がある所に連れて行った。

②夕方になつてその人は子供たちを置いて帰ってしまった。

③子供たちが家に帰れないと泣いていると、遠くに明かりが見えたので行ってみると大きな婆がいた。

④婆は風の神で子供たちの話を聞き連れてきたのは南風だといいい北風に子供たちを送らせた。

⑤村人は子供が帰つてこないで捜していると子供たちが帰つてきたので大喜びだった。

新版伝承地…新潟県古志郡山古志村、『とんと昔があつたけど』第一集 水沢謙一

テーマ…神様と子供たち、笑い話

備考…風の神、異境

96 「瘤二つ」旧〇、新〇

①目の上に大きな瘤のある坊さんが修行の旅の途中古辻堂で一夜を明かすことにした。

②夜遅く天狗がやって来て、酒盛りを始めた。

③坊さんは夜通し隠れるわけにもいかず、飛び出して一緒に踊った。

④坊さんを気に入った天狗はまた一度来いと言って質として目の上の瘤をむしりとった。

⑤坊さんは大喜びで故郷に帰った。

⑥近所に住む同じ悩みを持つ爺が話を聞き、瘤を取られに辻堂に出かけた。

⑦また坊さんが来たと思った天狗は大喜びで瘤を返した。

⑧爺の瘤は二つになった。

新版出典…『醒醉笑』
話 型…A T 503

テーマ…善と悪、笑い話

教訓…人の真似はするべきではない、物羨みをするべきでない

97 「奥州の灰まき爺」旧〇、新〇（「灰まき爺」）

①ある晩二人の爺は魚を捕るために川にわなを仕掛けていたが、翌朝悪い爺が見にくくと悪い爺の所に子犬が善い爺の所に魚が入っていたので、魚を取って子犬を善い爺の罫に入れて帰った。

②善い爺が見にくくと犬がいるので家で育てると犬はすくすく育った。

③犬は善い爺と山に行き爺が呼んだ鹿を殺した。

④話を聞いた悪い爺も犬を借りて真似しようとしたが言い間違いで蜂が現れ、怒った爺は犬を殺した。

⑤善い爺が犬を返してもらいに行くと、殺してこめの木の下に埋めたといわれ、こめの木を使って臼を作った。

⑥善い爺と婆が歌いながら臼を曳くと歌の通り金が出てきた。

⑦悪い爺と婆も真似をしたが歌の文句を忘れ間違ったため、汚いものが出てきて怒った二人は臼を燃やした。

⑧善い爺が臼を返してもらいに行くと燃やしたといわれたので、灰を持って帰った。

⑨爺は灰を歌いながら雁に投げると歌のとおり雁は死んでしまい婆と雁汁を食べた。

⑩悪い爺も真似して灰をまいたが、歌の文句を忘れてしまい目に灰が入り盲目になってしまった。

旧版伝承地…陸中江刺郡

新版伝承地…岩手県江刺郡、『江刺郡昔話』佐々木喜善

話 型…A T 1655 · cf. 1415

テーマ…善と悪

教訓…因果応報、人の真似はするべきではない
備考…花咲か爺

98 「鳥呑爺」旧×、新○

- ①山の畑で働いていた爺が、弁当の餅を食べ残りを木の枝に塗り昼寝をしていた。
②山雀が餅に引つかかってしまい可哀そうに思った爺は足についた餅をなめようとしたが、餅と一緒に山雀も飲み込んでしまった。
③臍から山雀の尻尾の先が出ており引つ張ると鳥の鳴くようなおならが出た。
④翌日殿さまの御殿の裏で竹を切っていると番人がやってきて何者か聞くので日本一の屁放り爺と名乗った。
⑤家来に連れられ殿様の前で聞かせると殿様一同は大喜びで褒美をたくさんくれた。

新版伝承地…長野県、『信濃昔話集』牧内武司

テーマ…笑い話

99 「団栗を噛んだ音」旧×、新○

- ①正直な爺が山へ薪を拾いに行き、日暮れに山を下りる途中団栗を見つけて帰った。
②家に帰らないうちに暗くなつたので、麓の破れたお堂に一晚とまることにした。

- ③寝ていると真夜中ごろ騒々しい声で目が覚めた。
④見ると鬼がいて怖くなつた爺は団栗を一つかみ砕いた。

⑤鬼は家の崩れる音だと慌てて逃げていった。

⑥爺は床の上に残っていた宝を集めて家に帰った。

⑦隣に住む悪い爺は話を聞き真似をして音を鳴らした。

⑧鬼は昨日音がしても家は潰れず、宝物が全部なくなっていたと家中探し周り爺を見つけ散々な目に合わせた。

新版伝承地…埼玉県川越市、「川越地方昔話集」鈴木棠三

テーマ…善と悪

教訓…人の真似はするべきではない

100 「白餅地蔵」旧×、新○

①ある年、まだよく実らないうちに猿が作物を食べ始めた。

②爺は全身に餅を塗り地蔵の格好をして畑の番をした。

③猿が地蔵に番をされてはゆっくり食べられない川向うへ運んでしまおうと爺を担ぎ上げた。

④川を渡り岸につくと猿は爺を降ろすが体が傾いた

ことで千両箱を使って支えた。

⑤ 猿が去った後千両箱を持って家に帰った。

⑥ 隣に住む婆が話を聞き羨ましがり爺の体に餅を塗って畑に出した。

⑦ 爺は川向うへ運ばれる途中おかしくなって嘔き出し笑ってしまった。

⑧ 猿は怒り散々爺をひっかき、血だらけにしてしまった。

新版伝承地…秋田県仙北郡角館町、『旅と伝説』

十四ノ五

テーマ…善と悪、笑い話

教訓…人の真似はするべきではない

101 「狼の眉毛」旧×、新○

① 大変貧乏な人が狼に食い殺してもらおうと山へ行った。

② 狼は男を見ても食おうとしない。

③ 狼によると、人の姿をしていても本性は畜生であるものだけを食うという。

④ 男がどうやってわかるのか聞くと、眉毛で見ればわかると一本抜いてくれた。

⑤ 男は四国遍路に出かけ一軒の家に宿を借りようとするが爺はこころよく泊めてくれようとするが婆

が断った。

⑥ 男は狼にもらった眉毛を試すと婆の姿は牛に見えるた。

新版伝承地…奈良県吉野郡大塔村、『吉野西奥民

族探訪録』宮本常一

テーマ…人の本性

102 「狐の恩返し」旧※107、新○

① 爺が蒔いた豆からできた大豆をすべて狐が食べてしまった。

② 爺が怒って怒鳴ると狐は謝り、金もうけをさせるといった。

③ 狐は一頭の良い駒に化けると爺はそれを長者に高値で売った。

④ 馬に化けていた狐が帰ってきた後、今度は茶釜に化けたので爺はそれを和尚に売った。

⑤ 和尚が茶釜を炉にかけるとときいきんきんと鳴り、小僧が川で磨くと「痛いそつと磨け」としゃべった。

⑥ 和尚が焚いた火にかけると狐は我慢できず尻尾を出して逃げていった。

新版伝承地…青森県北津軽郡五所川原町〔現五所川原氏〕、『津軽口魂集』内田邦彦

話 型… A T 325

テーマ… 恩返し

備 考… 化け狐

103 「木仏長者」旧×、新〇

① 貧しい男が長者の家に奉公していた。
② 下男が山に木を伐りに行くと、仏のような形のきのぼつくいを見つけ拾って帰り自分の部屋にまつり拝んだ。

③ 長者は働きの下男を長く自分のもので働かせた
いと考え長者が勝つたら下男は一生使え、下男が勝つたら長者の身代を下男に渡すという仏の相撲勝負を持ちかけた。

④ 勝負は下男の仏像が勝ち、下男は屋敷の主人となり長者は金の仏を持って出ていった。

⑤ 長者はだんだん落ちぶれ乞食になった。

⑥ 長者は仏像に文句を言うが、仏像によると長者の信心がないことが仏像の力を落としたという。

⑦ 長者は黄金像を抱いて一生乞食をして歩いた。

新版伝承地… 岩手県上閉伊郡遠野〔現遠野市〕、『老媪夜譚』佐々木喜善

テーマ… 成功からの転落、仏教信仰

教 訓… 仏を信じる心は大切

104 「海の水はなぜ鹹い」旧〇、新※114

① 金持ちな兄と貧乏な弟が住んでいた。

② 弟は正月の準備ができず兄に米を借りに行ったが貸してもらえず家に帰っていた。

③ 山路で爺が芝を刈っているに出会い、麦饅頭をもらいお堂で小人に麦饅頭と石の挽き臼を取り換え
てもらうよう言われた。

④ 弟は右に回すと欲しいものが何でも出て左に回すと止まる臼をもらい家に帰った。

⑤ 弟はたくさんのものを出して近所の人や親類縁者を呼んで祝い事をした。

⑥ 兄は臼の存在に気付き盗み出した。

⑦ 兄が島へ行つて一人で長者になろうと小舟に乗っているとき、塩が欲しくなり塩を出すが止め方が分からず小舟も臼も兄も海に沈んでしまった。

旧版伝承地… 陸中上閉伊郡

テーマ… 海の水が辛い理由、欲深い兄と優しい弟

105 「八石山」旧〇、新×

① 越後国の百姓の家に兄と継母と継母の子である弟がいた。

② 継母は兄を憎んでおり、自分の子にだけいい暮らしをさせたいと思っていた。

③ 継母は二人の兄弟に大豆を蒔かせてどちらの大豆がよく育つか比べるよう言った。

④ 継母は夜のうちに兄の畑の大豆をすべてほじくり出し、兄が大豆を蒔くのをさぼったと父親に言いつけ、小言を言わせようとした。

⑤ 継母が見落としていた一粒が山よりも高い大木になつて、秋には大豆が八石とれた。

⑥ 村の高い山を八石山と言うようになり、大豆の樹を使つて北条の専福寺の門柱がつくられた。

話 型… A T 1200 A, A T 1960 G

テーマ… 八石山の由来

106 「犬頭糸」旧〇、新×

① 三河国で二人の女が蚕を飼つて糸を取り暮らしていた。

② 一方の女はたくさん糸が取れるが、もう一方の女は糸が取れずだんだん貧乏になつた。

③ 多くいた蚕もほとんど死に、一匹しか残らなかつた。

④ 残つた蚕を大切に育てると珍しく大きな蚕になつたが、家に飼つていた白犬が食べてしまった。

⑤ 犬がくしゃみをするると鼻の穴から糸が出てきたので引つ張ると四五貫の糸が取れ犬は死んだ。

⑥ 真白で美しい糸だったため天子様の御服を作る糸として売れた。

⑦ 三河の絹糸がどの国よりも優れていたのは、犬飼蚕の種であつたからといわれる。

テーマ… 三河の糸が優れている理由

107 「狐の恩返し」旧〇、新※102

① 爺が蒔いた豆からできた大豆をすべて狐が食べてしまった。

② 爺が怒つて怒鳴ると狐は謝り、金もうけをさせるといつた。

③ 狐は一頭の良い駒に化けると爺はそれを長者に高値で売つた。

④ 馬に化けていた狐が帰つてきた後、今度は茶釜に化けたので爺はそれを和尚に売つた。

⑤ 和尚が茶釜を炉にかけるとときいきんと鳴り、小僧が川で磨くと「痛いそつと磨け」としゃべつた。

⑥ 和尚が焚いた火にかけると狐は我慢できず尻尾を出して逃げていつた。

旧版伝承地… 津軽五所川原

話 型… A T 325

テーマ… 恩返し

備考・化け狐

108 「聴耳頭巾」旧〇、新〇

①奥州に貧乏な善い爺がいた。

②氏神の稲荷様に何も上げられないので、自分を食ってくれと願うと氏神は難儀していることは知っているといい聴耳頭巾を爺に渡した。

③鳥のそばで頭巾をかぶると、声が聞こえ浜の長者の土倉の屋根に蛇が打ち付けられ苦しんでいることで長者の娘の体に障っていることが分かった。

④爺は八卦屋のふりをして長者の家に行き、娘を助けお礼金をもらい爺は大金持ちになった。

⑤家に帰り氏神様のお宮を立て直し、お祭りをした。

⑥爺が旅に出ると、鳥が町の長者の旦那の病気が庭の桶のせいであると話しているのを聞いた。

⑦爺は八卦屋のふりをして長者の家に行き、旦那を助け三百両もらった。

⑧爺は欲を出さず八卦をやめ普通の長者となって暮らした。

旧版伝承地…陸中上閉伊郡

新版伝承地…岩手県上閉伊郡土淵村〔現遠野市〕、

『老嫗夜譚』佐々木喜善

話型…A T 930 A + A T 554 + A T 670

テーマ…神からの贈り物、神のお告げ、動物のおしゃべり

109 「雀の宮」旧〇、新×

①野州の田舎で饅頭を丸のみにして食べるのを自慢にしている人がいた。

②悪いものが針を饅頭の中に入れての知らず、丸のみにすると腹が痛んで苦しんで寝てしまった。

③外を見ていると雀が一羽しきりに葦を食べているのを見ると雀の尻から葦の葉にくるまれた針の折れが出てきた。

④神様が葦を食べるといいと教えてくれたのだと自分も葦を食べると針が出てきて痛みがなくなつた。

⑤喜んでお社を立てたのが雀の宮だ。

話型…A T 612

テーマ…神のお告げ

110 「黒鯛大明神」旧〇、新〇

①土佐国の山奥の村に浜から一人の商人が魚を売りに入ってきた。

②山路の脇の林の中の罨に山鳥が一羽かかっているのを見つけた。

③山鳥が欲しいと思った魚売りは、山鳥を取って代

わりに自分の持っていた黒鯛を三尾挟んだ。

④村の人がやってきて山に黒鯛がいてさらにそれが畏にかかっているのは天の神のお示しだろうと社を立てた。

⑤評判が伝わりと方方から人がお参りに来て大変繁昌した。

⑥のちに魚売りがまたやってきて、山鳥を持って行った話をするまで繁昌のお宮となった。

新版伝承地…高知県

テーマ…神のお告げ、勘違い

111 「山の神と子供」 旧×、新○

①息子が十一か十二の時、自分が変わって働くので家にいるよう母に言った。

②息子は毎日山へ行き、母は弁当を作った。

③息子が木の枝に弁当をかけ仕事をしていると白髪の爺がやってきて弁当を食べた。

④三日間弁当をあげていると三日目に爺は自分が神様だと話し息子に天竺の寺に行くように言った。

⑤息子は道中頼まれごとを聞きながら天竺へ行っ

た。
⑥天竺につくと山で会った爺がいて、他人の頼まれごとをきくよう教え、たちまち樫の大木になった。

⑦帰り道に頼まれごとを片付けて最後に長者の家についた。

⑧子供は長者の娘の婿となり幸せに暮らした。

新版伝承地…鹿児島県大島郡沖永良部島、『沖永良部昔話集』岩倉市郎

話型…AT 460 B

テーマ…天竺の神のお告げ

教訓…情けは人の為ならず

112 「三人兄弟の出世」 旧×、新○

①夫婦の間に三人の息子がいた。

②父親が怠け者は家に置けないと三人を追い出した。

③途中道が三つに分かれていたのでそれぞれ別の道を選び、会う日を約束して別れた。

④一番上は大工の仕事をし、二番目は弓の師匠に弟子入りし、三番目は盗みを習った。

⑤約束の日になり三人はそろって家に戻った。

⑥その頃殿様の一人娘が鬼にさらわれ取り返したら褒美をやると言うおふれが出た。

⑦三人は協力して娘を殿様に返し褒美をもらい楽な一生を過ごした。

新版伝承地…鹿児島県薩摩郡甑島、『甑島昔話集』

岩倉市郎

話 型… A T 653、654、cf. A T 1525

テーマ…兄弟の力

113 「槍を持った星」旧×、新〇

- ① 長者の家の七人の息子と近所の貧しい子供は寺子屋へ行っていた。
- ② 寺子屋の先生が川で船を走らせるので船を持ってこいと言った。
- ③ 長者の子どもは大工に頼んで船を作ったが、貧しい家の子はどうしようもなく泣いていた。
- ④ 通りかかった修業者が板切れで船を作り粘土で舵取りの人形を作った。
- ⑤ 翌日川に浮かべると、粘土の人形がおもかじを取り長者の子より速く走った。
- ⑥ 長者の子が仕返しをしようと考えていると、先生が鳥を一羽ずつ描いた扇子を持ってくるよう言った。
- ⑦ 貧しい家の子が悩んでいると修業者が敗れた扇子を繕って鶏の絵を描いた。
- ⑧ 翌日貧しい子の扇子の鶏が鳴いたので貧しい子の勝ちとなった。
- ⑨ 怒った長者の子は槍を持って追いかけたが、寺子

屋の先生に止められた。

⑩ この様子が星になっているという。

新版伝承地…香川県仲多度郡佐柳島、『讃岐佐柳

島・志々島昔話集』武田明

テーマ…星の由来

114 「海の水はなぜからい」旧※104、新〇

- ① 金持ちな兄と貧乏な弟が住んでいた。
 - ② 弟は正月の準備もできず兄に米を借りに行ったが貸してもらえず家に帰っていた。
 - ③ 山路で爺が芝を刈っているに出会い、麦饅頭をもらいお堂で小人に麦饅頭と石の挽き臼を取り換えしてもらおう言われた。
 - ④ 右に回すと欲しいものが何でも出て左に回すと止まる臼をもらい家に帰った。
 - ⑤ 弟はたくさんのものを出して近所の人や親類縁者を呼んで祝い事をした。
 - ⑥ 兄は臼の存在に気付き盗み出した。
 - ⑦ 島へ行って一人で長者になろうと小舟に乗っているとき、塩が欲しくなり塩を出すのが止め方が分からず小舟も臼も兄も海に沈んでしまった。
- 新版伝承地…岩手県上閉伊郡、『老嫗夜譚』佐々木喜善

テーマ…海が辛い理由、欲深い兄と優しい弟

115 「餅の木」旧×、新○

①人がいい金持ちの兄と利口で兄をだまして一儲けしたいと考える貧しい弟がいた。

②弟は餅を木にひっかけて、兄に餅のなる木があるが買わないかともちかけた。

③兄は弟から木を買取った。

④兄は餅がならず騙されたことを知り弟を怒鳴った。

⑤弟はすました顔で一番大きいのが親餅で食べてしまえばもうなることはないと言った。

新版伝承地…長崎県下県郡仁位村〔現対馬市〕、

『くったんじじいの話』鈴木棠三

テーマ…利口な弟、頭がいいと得をする

116 「分別八十八」旧※134、新○

①奥州のある村に八十八という名前の男が六人いて、区別がつかないのであだ名をつけていた。

②ある日外道八十八が博奕八十八を殺してしまい、分別八十八に相談に行くと百姓八十八の田の水口

においておくといいと言われその通りにした。

③百姓八十八は人影を見て水を盗みに来た泥棒だと思い後ろから棒で打つと博奕八十八であった。

④土産を持って分別八十八の所に行き相談すると。

空俵に詰め米屋八十八の蔵の一番上に置くよう言われ言うとおりにした。

⑤盗人八十八は米俵だと思いいその俵を盗んでしまいい、どうすればいいだろうとお礼を持って分別八十八の元へ相談に行った。

⑥解決方法を聞いた盗人八十八は言われたとおりにし井戸に死体を放り込んだ。

⑦分別八十八だけはお礼をもらい上手いことやった。

新版伝承地…岩手県上閉伊郡土淵村〔現遠野市〕、

『老媪夜譚』佐々木喜善

テーマ…頭がいいと得をする、笑い話

117 「二反の白」旧※135、新○

①五月の節句前に嫁と姑が五月人形を出して田原藤太か八幡太郎か言い争いをしていた。

②その晩姑は白木綿を持って寺に行き自分を勝たせてくれるよう頼んだ。

③嫁も白木綿を持って寺へ行き勝たせてくれるよう頼んだ。

④翌日和尚は笑いながらこれは仁田の四郎ただどりという人形だと答えた。

話 型…話 型…A T 1861 A, M o t. J 1192, J 1192, 1

新版伝承地…長野県南安雲郡

テーマ…争いで損をする、笑い話

118 「蜥蜴の目貫」旧〇、新×

①彫物師が庭に形の美しい蜥蜴を見つけ、それを彫刻し銀の目貫を作った。

②道具屋にもつていくと次々と売れた。

③いくつ作っても売れるので、豊かな暮らしができるようになった。

④彫物師は蜥蜴が夏でも冬でもいて、自分にしが見えないので気味が悪くなり殺した。

⑤殺した後から細工が下手になり目貫も売れず貧乏な彫物師になった。

テーマ…欲にとらわれる、成功からの転落

教訓…生き物は大事にするべき

119 「長崎の魚石」旧〇、新×

①長崎の伊勢屋で懇意にしている唐人がいた

②唐人は国に帰る前に石垣に積んであった青石を譲ってほしいと伊勢屋の主人に頼った。

③百両出すといった唐人によって青石が貴いものだと気づいた主人は欲を出し、三百両出すと唐人に

言われても手放さなかった。

④唐人が国に帰った後、主人は石を掘り起こし鑑定させたが普通の石ではなさそうというばかりで磨いても光らなかつた。

⑤石にたがねを入れると真中から二つに割れて中から水が出て金魚のような赤い小鮒が飛び出してすぐ死んだ。

⑥青石を買おうと戻ってきた唐人に話すと、唐人は悲しみ石は魚石と呼ばれ王侯貴族が求めているので本国で売って安らかに暮らそうと思っていたと話した。

⑦遠い国の商人は思うことを顔に出さず値段の駆け引きをする癖があるため、日本の商人は物を知らずただ欲深かつたため損をした。

話 型…M o t. N 523

テーマ…欲にとらわれる、利益を追いすぎると損をする

120 「瓜の大事件」旧〇、新×

①八幡太郎義家と安倍晴明と、名医と名僧の四人が道長の家に来合せた。

②御殿の御物忌の日に外からの献上物を入れてもよいものかというので、安倍晴明が占いをした。

③ 献上物である瓜の中に一つだけ毒気のあるものがあるとかかった。

④ 名僧に加持をさせると、瓜の一つが跳ね上がったので、それに毒気があるとかかった。

⑤ 名医が瓜の二か所に針を立てると、瓜は飛び上がらなくなった。

⑥ 八幡太郎義家が瓜を切ると、占いの通り小蛇がおり、針は両眼に刺さっていて、首が切り落とされていた。

テーマ…不思議な能力

121 「死後の占い」旧〇、新×

① 北国街道の村の女が一人で住んでいる家に、京都へ帰る旅人が一晩泊まった。

② 次の朝旅人が帰ろうとすると、家主の女が金千両の貸しがあるからそれを返せと言った。

③ 女は、父が亡くなる時に、十年後の今月の昨日旅人が泊まり千両を返してくれると言い置いたと言った。

④ 優れた占い師である旅人は、奥の間の一本の柱に約束の千両が入っていると行って京へ帰った。

⑤ 女の父親は娘が一度は困ることを知っていたため、八卦を見ておいたのだった。

テーマ…不思議な能力

122 「乞食の金」旧〇、新×

① 浅草の福井町に善五郎という信心深い貧乏人がいた。

② ある年の暮れ、死ぬくらいなら盗みをして正月だけは楽に越そうと妻に相談するが反対される。

③ 妻が寝てから、近所の大家に入ろうと板塀を越えようとして足を滑らせ気絶した。

④ 夢を見るように大黒天が現れ、その足元には金銀財宝が山のようにあった。

⑤ 何故自分に少しも恵んでくれないのか聞くと、財宝にも主があるので頼んで借りるしかないと言った。

⑥ その主はどこにいろか聞くと、近くの橋の袂で寝ている乞食が主だと言う。

⑦ すぐに乞食のもとへ行き、三百両の借り入れ証文を渡し、親類の付き合いをする契約までした。

⑧ 頼んだので金が見つかるかもしれないと、床板を上げ縁の下を探すと、三百両が見つかった。

⑨ 三百両を元手に稼ぎ、乞食に家を持たせ、両家繁栄した。

⑩ 乞食の家から養子ももらい、財産を譲ることに

なったので結局は大黒天が示した通りになった。

テーマ…神のお告げ

123 「拾い過ぎ」旧〇、新×

①青山に門奈助左衛門という金持ちの武士がいて、その家来にとっても正直な男がいた。

②主人の使いで浅草の蔵宿に行つて五十両を受け取つて帰る途中、転んでしまった。

③屋敷に帰つて手汚れた手を洗おうと思ひ、財布を部屋の鴨居に引つ掛けておいて忘れてしまった。

④五十両を主人に渡そうとして財布がないことに気づき、あわてて飛び出した。

⑤転んだところへ戻ると、まだ小判が散らばつていたので拾つて数えると三十八両まであった。

⑥十二両も不足したのは困つたことだが、とにかく説明しようと家に帰ると財布は鴨居にかかつていた。

⑦三十八両は拾い物だと気づき諸方へ知らせたが、落とし主が出てこないの自分物になった。

⑧これを元手に立身したのは常から正直の報いだろうということである。

テーマ…正直な男

教訓…正直でいると報われる

124 「山賊の弟」旧〇、新×

①越後の農家に兄弟の子供がいたが、兄の性質がよくないので勘当したらどこかへ行つてしまった。

②父が死に、家が立ち行かなくなったので田地を売り、弟は江戸の医者之家に奉公に入った。

③十年ほどの間に、十四五両の貯蓄ができたので、主人に事情を話し国に帰ろうとした。

④上州の山路で山賊に遭ひ、金や身の回りの物を残らず剥ぎ取られた。

⑤山賊に手下にでも家来にでもしてくれと頼み、山賊の隠れ家に行つた。

⑥二三日して、やはり山賊は向いていないと思ひ、錆びた脇差を一本だけ貰つて医者之家へ戻つた。

⑦医者に脇差を見せると、価値のあるものだと言ひ、三十両で売られたので、再び国へ戻つた。

⑧途中山賊のところへ行つて、儲けた十五両を返すと言つと、山賊の親方が兄だとわかつた。

⑨二人で国之家に戻り、跡目を譲り合う内に兄は出家してしまつた。

テーマ…二人の兄弟

125 「力士と産女」旧〇、新×

①羽後の横手に妹尾五郎兵衛という人がいた。

②ある明け方に蛇の崎の橋を通ると、女に赤子を抱いていくれと預けられた。

③赤ん坊を抱いていると、女が戻ってきて、力を上げましようとして手拭いを置いて行った。

④翌日顔を洗おうとする時に、手拭いを絞ると切れたので、大力を授かったとわかった。

テーマ…男の大力

126 「女の大力」旧〇、新×

①紀州に毛原の茗荷という人がいた。

②村の観音淵の上を通っていると、竜宮の乙姫に水の底で光っている物を除けてくれと頼まれた。

③川に飛び込み光る物を取り上げて見ると、一寸八分の観音の像だったので淵を観音淵というようになった。

④乙姫がお礼をくれると言うので、千人力を授けてもらった。

⑤千人力では踏むたびに路が壊れてしまうので、願いを直して相手一倍にもらった。

⑥約束を破って女に物を手渡ししてしまったので、力は息子ではなく娘に継がれるようになった。
テーマ…女の大力

127 「大い子の握り飯」旧〇、新×

①近江の石橋の里に、大い子という大力の女がいた。

②旱の年に田への水を村の人にとめられたので、大きな石を置いて水が流れないようにした。

③村人がお詫びをしたので大い子は石をどけてやり、石は大い子の水口石と呼ばれた。

④又、越前国から佐伯氏長という力士が、京に出ようとしてこの里を通った。

⑤若いきれいな娘が水の桶を頭に載せて歩いていたので、後ろから腋の下をくすぐろうとした。

⑥娘は笑って、片手を桶から放して佐伯の手さきを腋の下に挟んでしまった。

⑦抜くことが出来ず、大い子の家まで引っ張られてついて行った。

⑧佐伯が晴れの相撲に召されて都に登るのだと言うと、大い子の家で三週間練習することになった。

⑨大い子は毎日飯を強く炊いて、むすびを握って食べさせた。

⑩始めは食い割ることが出来なかったが、三週間目には自由に食べられるようになった。

⑪楽々食べられるようになったなら大丈夫と言ってくれたので、佐伯は大喜びで相撲の節に出て行った。

テーマ…女の大力、男の大力

128 「日田の鬼太夫」旧〇、新×

① 豊後の日田に、大蔵永季、通称を鬼太夫という力士がいた。

② 京都の相撲の節に召され、出雲の小冠者という天下第一の力士と力を競べるようになった。

③ 京都に上る途中で筑前の老松明神の社に参詣し、武運を祈った。

④ その夜明神が鬼太夫の夢枕について、小冠者の身体には額にだけ柔らかい部分があると教えてくれた。

⑤ 鬼太夫はそのお蔭で勝つことが出来たので、鬼太夫の子孫は永く老松明神を氏神として祭った。

テーマ…男の大力

129 「稲妻大蔵」旧〇、新×

① 肥前の諫早に、母が八天岳の山の神について生まれた稲妻大蔵という相撲取りがいた。

② 天狗様の申し子だったので、如何なる敵に会っても勝ち、日本一の大力士となった。

③ 或年の晴れの勝負の前に、相手になる力士に頼まれたら一度だけ勝ちを譲ってやった。

④ 忽ち天狗が稲妻の身を離れ、それからは弱い力士

になってしまった。

旧版伝承地…肥前北高来郡

テーマ…男の大力

130 「藤抜き喜内」旧〇、新×

① 加賀の大杉谷の瀬領という村に、喜内という力の強い人がいた。

② その評判が遠い国々まで響いたので、ある勇士が力競べに来た。

③ ちょうど田植えごしらえをしていた喜内に、その武士が喜内の家は何処かと尋ねた。

④ 力競べに来たとわかったので、喜内は馬がついたままの唐鋤の横木を引き上げて、屋敷を指して教えた。

⑤ 武士はその大力に仰天し、お前が喜内だろうと言うと、喜内の家の下男ですと答えた。

⑥ 武士は下男でさえもこの通りなのだから、主人はどのくらい強いかわからぬと言って逃げて帰った。

旧版伝承地…加賀能美郡

テーマ…男の大力

131 「阿波の大力熊野の大力」旧〇、新×

① 阿波国の有名な相撲取りが、紀州の熊野に瀬田川

というえらい大力がいると聞き、力を競べに尋ねた。

② 瀬田川は留守で、母親が片手で出してくれた火鉢は両手でもなかなか持ち上げられそうになかった。

③ 山ほどの柴の荷を背負った瀬田川が戻ってきたので、とても叶うまいとは思ったが相撲を取った。

④ 熊野の大力は太い竿竹をまわしに締めると、直ぐさま阿波の大力を持ち上げ、砂の中に深く埋めた。

⑤ 瀬田川がいるうちほとても日本一は取れないと帰ったというが、今はそんな大力の子孫はいないそうだ。

旧版伝承地…紀伊西牟婁郡

テーマ…男の大力

132 「仁王とが王」旧〇、新〇

① 日本の仁王様の所へ唐からが王様が力競べにやってきた。

② が王様を試そうと、鉄の棒をちぎって団子を作りお茶菓子に出した。

③ が王様は我慢して、これは結構だと言って食べてしまった。

④ これならば兄弟分になって観音様の門番をしても

いいと言って二人が門番になった。

⑤ 今でも仁王様は鉄の棒を持っていて、大きな口を開けて食べようとしているのが唐のが王様だという。

新版伝承地…長野県南安曇郡

テーマ…大力、力くらべ

133 「旦九郎と田九郎」旧〇、新×

① 旦九郎と田九郎の二人の兄弟がいた。

② 兄の旦九郎は金持ちで知恵が足らず、弟の田九郎は悪がしこいくせに貧乏だった。

③ 田九郎の家で茶釜の湯が余りに煮えくり返るので板の間におろしていたところに旦九郎が遊びに来た。

④ 火なし釜という宝物だと教えられた旦九郎は十兩で譲ってもらい持って帰った。

⑤ よく洗って水を入れ板の間に置いてもお湯が沸かないので直談判に行くと、洗ってはだめだと言われた。

⑥ 又田九郎が小判を二枚馬小屋に放り込んでおくと、見つけた旦九郎がこの馬は小判をひっつけていると言った。

⑦ 金のひり馬だと教えられた旦九郎は金五十枚で買

い、新しく小屋を建てたが小判など落とさなかった。

⑧ 又だましたかと掛け合いに行くと、田九郎は板張りの厩に繋いではだめだと答えた。

テーマ…二人の兄弟、笑い話

教訓…うまい話を簡単に信じてはいけない

134 「分別八十八」旧〇、新※116

① 奥州のある村に、八十八という名前の男が六人住んでいたの、あだ名をつけて区別していた。

② 外道八十八が喧嘩の末博奕八十八を殺してしまい、困って分別八十八の所へ相談に来た。

③ その死骸を百姓八十八の田の水口に持って行って、田の畔にしゃがませて置いて見よと教えた。

④ その晩百姓八十八が見回りに出て、自分の田の水口の人影を盗人だと思ひ棒で打つと博奕八十八だった。

⑤ 分別八十八の所にお土産を持って相談に来たので、死体を空俵に詰めて米屋八十八の倉の前に置くと教えた。

⑥ 次の晩に盗人八十八がその俵を盗み、開けてみると博奕八十八の死骸だったので、お札を持って相談に行った。

⑦ 今夜遅くに博奕八十八の家の戸を叩いて今戻ったと言って、博奕八十八を門口の井戸に投げ込めと教えた。

⑧ 分別八十八だけはみんなからお礼をもらい、一人でうまい事をした。

旧版伝承地…陸中上閉伊部

テーマ…笑い話

135 「二反の白」旧〇、新※117

① 五月の節句の前に、五月人形を箱から出してきて、この人形は田原藤太だ、八幡太郎だと嫁と姑が言い争った。

② 明日和尚さんの所へ行つて、どちらが本当かきめて貰うことにした。

③ その晩のうちに姑はそつと白木綿を一反持つてお寺に行き、私を勝たせてくださいと和尚に頼んだ。

④ 嫁もまた白木綿を持って、同じことを頼みに来た。

⑤ 翌日二人が揃って来て、どちらが間違っているか聞くと、和尚は笑いながらこちらでも一反の白、あちらでも一反の白、即ち仁田の四郎ただとりという人形だと答えた。

テーマ…笑い話

教訓…ずるをして勝とうとしても意味がない

136 「無言くらべ」旧〇、新〇

- ①ある所に、この上なく餅の好きな夫婦がいた。
- ②少しばかり残った餅を、今夜黙り競べをして勝ったほうが食べることにしようとして約束した。
- ③その晩泥棒が入り、夫婦は二人ともそれを知っていたが、物を言うとは負けになるので我慢していた。
- ④泥棒はいい気になり、方々探し散らし、おしまい餅の木鉢を持ち出そうとした。
- ⑤女房は堪らなくなつて、あれ盗人が餅を持って行くかとわめくと、亭主は餅はもうおれの物だとなつた。

⑥泥棒がそれを承知したか、どうだろうか。

テーマ…笑い話

教訓…欲深すぎると良いことにはならない

137 「古屋の漏り」旧〇、新※17

- ①爺と婆が虎狼よりも怖いのは古屋の漏りだと言っているのを、表を通っていた虎狼が聞いた。
- ②ちようどこの家に入ろうとした馬盗人が、馬かと思つて虎狼の背中に乗った。
- ③古屋のもりに捕まつたと思つた虎狼が一目散に飛んで走つたので馬盗人はふり落とされ、空井戸の中に落ちた。

④やつてきた猿が虎狼の話の聞き、検査してやると尻尾を空井戸の中へさしこんだ。

⑤馬盗人がそれをしつかりと掴み、猿もびつくりして尻尾を強く引こうとしたので根元から切れてしまった。

旧版伝承地…肥後阿蘇郡

テーマ…猿の尾が短い理由、笑い話

教訓…出過ぎたことをすると損をする

138 「鼠経」旧×、新〇

①ある人が犬をつれて山へ狩りに行き、日が暮れたので一軒家に泊めてもらった。

②その家の爺と婆に、狩人の村のお経を教えてくださいと頼まれた。

③狩人はお経の文句を覚えていなかったので、困つて天井を見上げ、何と言つたものかと考えた。

④ねずみがちよろちよろ出てきたので、ちよろちよろするのはなんじやいな、と言ふとねずみがしゃがんだのでそれ、それ、しゃごだと言つた。

⑤爺と婆はありがたいお経を教わつたと思ひ、毎日繰り返した。

⑥ある晩その家に泥棒が入りかけ、ちよろちよろ中の様子をうかがつた。

⑦爺と婆が仏様の前でちよろちよろするのはなんじやいなどお経をあげると泥棒は見つかったかと思ひ、障子のかげにしゃがんだ。

⑧爺と婆がそら、そけ、しゃごだとお経をあげたので、泥棒は自分のことをいわれたと思つて逃げて行つた。

新版伝承地…熊本県葦北郡水俣町〔現水俣市〕、『昔話研究』一ノ七

テーマ…笑い話

139 「蛙の人まね」旧×、新〇

①岩手県二戸郡の二佐平のようなところの川に、蛙が一匹住んでいた。

②ある日、九戸の方から一人のばくろうが馬に乗つて、歌いながら福岡の方へ向かつていった。

③それを見た蛙は、ばくろうのような声が出してみたいと思つたが、どうしてもいい声が出なかつた。

④声を張り上げて歌うと、おどろいたばくろうが何をしているのかと聞いた。

⑤蛙が説明すると、伊勢参りについて行くことになつた。

⑥盛岡の方までやってきた時に、蛙は人間が二本足で歩けるのだからおれだつて立つて歩けるはずだ

と考へた。

⑦馬から下りてやってみると、うまく歩けたので喜んでどんどん歩いて行つた。

⑧しばらくすると、行く手に二佐平のようなところが見えるので、よく見てみると、自分の住んでいたところだつた。

⑨蛙の目はうしろについているので、二本足で立つて歩いたらあともどりして、もとのところに帰つてしまつたというわけだ。

新版伝承地…岩手県二戸郡爾薩体村仁佐平〔現二戸市〕、『二戸の昔話』菊池勇

テーマ…笑い話

140 「そら豆の黒いすじ」旧×、新〇

①婆がおかずを煮ようと豆を鍋に入れるときに、一粒落ちて庭の隅へころがつていった。

②婆がたきつけの藁を持つてくると、風が吹いて藁が一本、庭の隅へ飛んで行つた。

③婆が火をたきつけて仕事をしていると、真っ赤におこつた炭が一つ、落ちて庭の隅へころがつていった。

④庭の隅に集まつた豆と藁と炭とは、伊勢参りに行くことになり、そろつて出かけた。

⑤川のところに来ると、藁が橋になり、炭が先に渡ることになったが、半分のところまで進めなくなり、そのうちに藁が燃え出して炭と一緒に川の中へ落ちてしまった。

⑥それを見た豆が大笑いすると、お腹がはじけてしまった。

⑦困って泣いているところに裁縫屋が通りかかり、わけを話すと針と糸を出して縫ってくれた。

⑧青い糸がなかったため黒い糸で縫ったので、そら豆には黒いすじができたそうだ。

新版伝承地…静岡県浜名郡芳川町〔現浜松市〕、『静岡県伝説昔話集』

テーマ…そら豆の筋の由来

141 「百足の使い」旧×、新○

①ある時、百足と蚤と虱とが寄り合った。

②寒い日だったので、酒を買って飲むことになり、誰が買いに行くかという話になった。

③蚤は瓶を割りそうだからできない、虱は歩くのが遅いから役に立たないというので百足が行くことになった。

④いくら待っても百足がもどってこないの、見に出かけると庭の隅で百足が何かしているのを見つ

けた。

⑤何をしているのか、と声をかけると、百足は足がたくさんあるものだから、まだわらじをはいているところだと答えた。

新版伝承地…長崎県西彼杵郡伊王島、『伊王島村郷土史』松尾謙治

テーマ…笑い話

142 「清蔵の兎」旧○、新○

①清蔵が友達と山へ遊びにいくと、草の中に兎が昼寝していた。

②一人があんなところに兎が死んでいると言うと、清蔵はどうりで先ほどから臭いと思っていたと言った。

③兎が人の声に目を覚まして走っていったので、なんだ昼寝をしていたのかと友達が驚くと、清蔵はだからおれもなんだか耳が動くようだと思つていたらと言った。

④それからいい加減なことをいう人を清蔵さんの兎のようだと言えらるようになった。

テーマ…笑い話

143 「鳩の立ち聴き」旧○、新○（「鳩の立ちぎき」）

①ある山家の村で、爺が川の向こうの山畑に働いて

いた。

②川のこつちの爺が声をかけて、今日は何をまくかと聞くと、返事はせず手招きをした。

③川を渡ってそばまで行つて、どうしたかというところ、その耳に口を寄せて、おれは大豆をまいていると言った。

④豆をまくのがどうして内緒ごとだと聞くと、それでも鳩に聞かれると大変だからと言った。

旧版伝承地…上野吾妻郡

新版伝承地…群馬県吾妻郡、『吾妻郡誌』

テーマ…笑い話

144 「杖つき虫」旧〇、新〇

①座頭が一人、琵琶を背負つてある山家の村を通つていると、川の向こうの畑の爺が、こちらの爺へ声をかけた。

②やいやい、あれを見ろ、大きな杖つき虫が出た、六年前にもあの虫が出た時は小豆がよく取れた、今年も小豆が豊作であろうと言った。

テーマ…笑い話

145 「首筋に蒲団」旧〇、新〇（「首筋にふとん」）

①貧乏で藁をかぶつて寝ていた人が、恥ずかしいから藁の中に寝ていると言ふな、人の前では蒲団と

言えと、子供に教えていた。

②ある時お客に行つた席で、「ととよ、ととの首筋に蒲団の葉がくつついているよ」と子供が言ったそう。

テーマ…笑い話

146 「木のまた手紙と黒手紙」旧×、新〇

①ある山の中の村に婆と娘がいた。

②娘は遠い隣村にお嫁に行き、音沙汰もないので心配になった婆は隣の人に手紙を持つて行つてもらった。

③隣の人が娘に手紙を渡すと、返事を書いて婆に届けてくださいと渡した。

④二人とも字は書けないので、婆は「あねまた、んなまた、なぜまた、来ねまた」というつもりで木の股を四つ書き、娘は隙間もないほど紙を墨で真つ黒に塗り、「帰りたいが隙がなくて帰れない」ということを書いたのだった。

新版伝承地…新潟県古志郡山古志村、『とんと昔があつたげど』第一集 水沢謙一

テーマ…笑い話

147 「知つたかぶり」旧〇、新〇

①よそに行つて初めて鰻鮓を食べた人が、給仕の子

供になんという名前だと尋ねた。

②子供は自分の名前をきかれたのかと思って、弥二郎ですと答えた。

③村の人たちと町へ出た時に、ほし鯉鮓がかけてあるのを見た。

④つれの者に、生弥二郎があんなに干してある、あれをゆで弥二郎にしてみなに食わせてみたいなど言った。

テーマ…笑い話

148 「やせ我慢」旧〇、新〇

①ある威張った武士が、田舎の農家に来て泊まった。

②今晩はひどく寒いので蓆でも掛けて寝てくださいと言うと、無用なことだと行ってごろ寝した。

③夜中に寒くなって困ったので、家の者を起こして、この家の鼠には足を洗わせてあるかと聞いた。

④そんなことはしていないと答えると、踏まれると着物が汚れるから蓆を出してくれと言った。

テーマ…笑い話

149 「慾ふか」旧〇、新〇

①ある所に慾の深い婆がいて、なんでもかんでももしいらぬなら私に下さいと言って、貰っていた。

②ある時近所の家で猫が鼠を捕って尻尾だけ食い残

したのを、あの婆もこれだけは下さいと言わないだろうと笑っていると、ちょうど婆が遊びに来た。

③鼠の尻尾をみた婆は、御不用なら私に下さいと言った。

④みな驚いて、これを何にするのかと問うと、錐の鞘にいたしますと答えた。

テーマ…笑い話

150 「物おしみ」旧〇、新〇

①二人の物惜しみが隣りどうしに住んでいた。

②ある時一方の主人が隣りへ使いをやって、釘を打ちたいので鉄槌を貸してくださいと言わせた。

③こちらの主人はその釘は木の釘か鉄の釘か尋ね、鉄の釘だと答えると折り悪く鉄槌は外へ貸していると言った。

④返事を聞いた借り主はあきれかえり、鉄槌が痛むかと思つてうそをつくとはけしからぬ、仕方ないから家の鉄槌を出して使おうと言った。

テーマ…笑い話

151 「盗み心」旧〇、新〇

①ある男が、雪の降った日に人の家へ遊びに行った。

②あまり外が明るかったので、家の中に入ると真っ暗で夜ようだった。

③上がっていくと、上がり端で何か冷たい物を踏んだので、手に取って見ると小さい鉈だった。

④前からこんな鉈が一つ欲しいと思っていたので、誰にも見えまいと思つてそつと懐へ入れた。

⑤ところが少しすると、家の中はさほど暗くもなく、家の人たちがこの様子をよく見ていたことがわかった。

⑥これは困つた、どうすればよいかと思つていると、また一人、外から遊びに来た者がああ暗い暗いとなつた。

⑦それを聞いて、鉈を盗んだ男が好いまじないがあるから教えてやろう、これくらいの鉈をちよつと懐に入れておくとすぐに明るくなる、と言つて鉈を渡した。

テーマ…笑い話

152 「智の世間話」旧〇、新〇

①智どのが舅の家に行く時に、面白そうな世間話を用意しておいて、好い時刻に出すのがよいと友達に教えてもらった。

②一通りの挨拶がすみ、酒盛りが始まった頃に、智は世間話をした。

③舅殿、お前様は一かかえほどある嶋をご覧になつ

たことがありますか、いや見たことがない、そうですか、私も見たことがござりませぬと言つた。

テーマ…笑い話

153 「下の国の屋根」旧〇、新〇

①ある村で井戸を掘ったら、いくら掘つても水が出てこない。

②それでも毎日掘り下げて行くと、黒く燻った藁が出てきた。

③それを取り除けて掘ろうとすると、下から大きな声でどなりつけられた。

④上の国の奴らは何をするか、それはおれの家の屋根の藁だ、それを剥いでどうするか、と非常に怒られたという大うそつきの話。

テーマ…笑い話

154 「博奕の天登り」旧〇、新〇（博奕うちの天登り）

①博奕に散々負けて帰ってきた悪者が、一人で賽をころがして遊んでいると、天狗が賽を欲しがつたので羽団扇と交換した。

②鼻を煽ぐと伸び、裏返しで煽げば低くなる団扇を持つて長者の家の門の脇に立っていると、一人娘が出てきたので鼻をうんと煽いだ。

③鼻が七尺にもなつてしまひ娘が毎日泣いているの

で、長者は元通りにした者を智に取ると高札を立てた。

④男が来て、少しずつ娘の鼻を低くしたので家の者は皆喜んだ。

⑤得意になって涼んでしていると眠ってしまい、自分の鼻を夢中で煽いで天に届いているのも知らずにいた。

⑥天の川でちょうど川普請があり、男の鼻は橋杭にされた。

⑦気がついた男は慌てて鼻を戻そうとしたが、くくりつけられているので体の方が橋に引き寄せられ、天に登ってしまった。

テーマ…笑い話

教訓…調子に乗ると良いことにはならない

155 「空の旅」旧〇、新〇

①運のよい男が、への字の形に曲った鉄砲で雁を打つと、一発の弾で並んでいた雁がみな落ちてきた。

②それを帯の間に挟んで、路を歩いているとその雁が生き返った。

③空を飛び、大和のある寺の五重の塔の上に、男を残して行ってしまった。

④上から助けを求めると、寺や村から多くの人が出

て、大きな風呂敷に綿を載せ、四隅を持って塔の脇に広げた。

⑤飛んで降りた拍子に、風呂敷が袋になり四隅を持った坊さんたちが寄り合って眼から火が出た。

⑥その火が綿について風呂敷も五重の塔も、男も焼けてしまった。
テーマ…笑い話

三、昔話一覧と伝承地

両版の構成に従い整理した全一五五話（上記通し番号）の一覧用として、記載された伝承地を分布地図とあわせて以下に示した。なお、地図については新版掲載地図とは別に、旧版にのみ所収されていた話の伝承地図を新たに作成した。（家勉キッズ、jeben.netを使用し、一部トリミングをおこなった。）

・数 字（ex…1 2 3） 新旧版両方に所収されている話の伝承地番号

・丸数字（ex…①②③） 新版にのみ所収されて

いる話の伝承地番号

・黒丸数字（ex…**①****②****③**） 旧版にのみ所収されて

いる話の伝承地番号

・※番号参照 話の錯簡箇所に対応

昔話一覽

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
鷺の卵	山の神の靱	猿聳入り	×	猿と藁との餅競争	猿と猫と鼠	貉と猿と獺	狸と田螺	鷓鴣も鷹の仲間	蝉と大師様	梟染め屋	×	×	×	時鳥と百舌	時鳥の兄弟	鳩の孝行	雀と啄木鳥	海月骨無し	猿の尾はなぜ短い	
○	×	○	古屋の漏り※137参照	○	○	○	○	○	×	○	かせかけみみず	雲雀の金貸し	片足脚絆	○	○	○	○	○海月骨なし	○	
18		17	16	15	14	13	12	11	①	10	⑨	⑧	⑦	6	5	4	3		1	地図番号

43	×	山梨の実	③〇
42	×	×	⑧
41	×	×	⑦
40	○	×	29
39	×	人影花	⑳
38	○	×	27
37	○	×	26
36	○	×	25
35	×	×	⑥
34	×	×	
33	×	×	
32	×	×	⑤
31	×	×	④
30	×	×	③
29	○	×	24
28	×	×	②
27	×	蛇の息子	
26	○	×	㉒
25	○	×	21
24	×	金の斧銀の斧	㉑
23	○	×	19
22	×	×	
21	×	×	

66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44
長者の宝競べ	二十騎が原	炭焼小五郎	藁しべ長者	だんぶり長者	蛸島の蛇	夢を買った三弥大尽	×	×	×	狐が笑う	湊の杓	山伏の狸退治	芝右衛門狸	比治山の狐	×	×	×	片目の爺	小僧と狐	俄か入道	×	×
×	×	○	○藁しび長者	○	×	×	寝太郎三助	夢を見た息子	味噌買橋	×	○	×	×	×	猫と狩人	化けくらべ	たのきゆう	○	○	○にわか入道	古箕にふるしき、古太鼓	三枚のお札
		45	④④	43	⑫	⑪	④②	④①	④④		39	⑩	⑨		③⑧	③⑦	③⑥	35	34	33	③②	③①

89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67
笠地藏	×	大歳の焚き火	爺に金	盲の水の神	×	×	狐女房	矢村の弥助	×	竈神の起り	×	×	山姥の宝蓑	米囊栗囊	×	瓜子姫	鶯姫	×	本取山	梅木屋敷	湖山の池	会津の鶴塚
○	ものいう墓	○大歳のたき火	○	×	蛇の玉	蛙の女房	○	○	寄木の神様	○	絵姿女房	姥皮	○	○米ぶくろ栗ぶくろ	竹の子童子	○	○	金の椿	×	×	×	×
63	⑥2	61	60	①4	⑤9	⑤8	57	56	⑤5	54	⑤3	⑤2	51	50	④9	48						⑬3

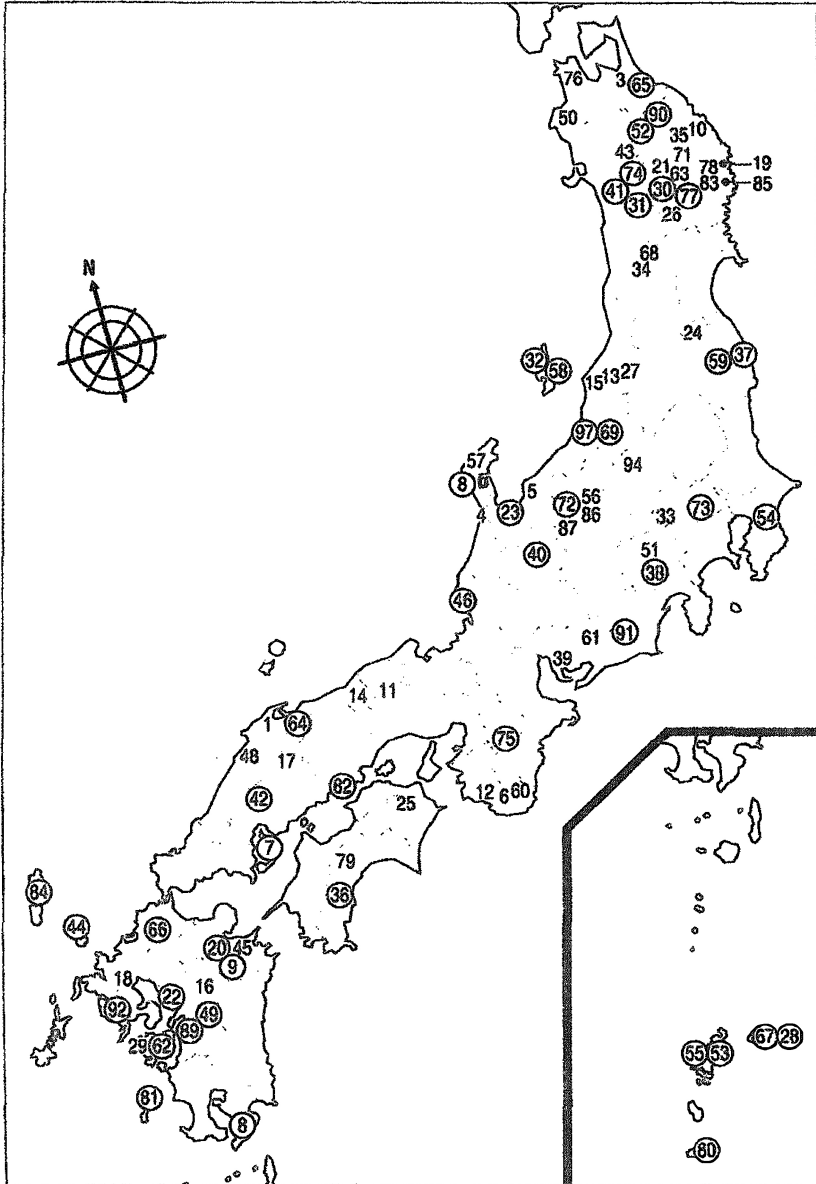
112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90
×	×	黒鯛大明神	雀の宮	聴耳頭巾	狐の恩返し	犬頭系	八石山	海の水はなぜ鹹い	×	×	×	×	×	×	奥州の灰まき爺	瘤二つ	×	団子浄土	×	×	×	×
三人兄弟の出世	山の神と子供	○	×	○	×※102参照	×	×	×	木仏長者	狐の恩返し※107参照	狼の眉毛	白餅地藏	団栗を噛んだ音	鳥吞爺	○灰まき爺	○	風の神と子供	○	かくれ里	鼠の浄土	見るなの座敷	銭の化物
⑧1	⑧0	79		78		①5	83	⑦7	76	⑦5	⑦4	⑦3	⑦2	71		⑥9	68	⑥7	⑥6	⑥5	⑥4	

135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113
二反の白	分別八十八	旦九郎と田九郎	仁王とが王	阿波の大力熊野の大力	藤抜き喜内	稲妻大蔵	日田の鬼太夫	大い子の握り飯	女の大力	力士と産女	山賊の弟	拾い過ぎ	乞食の金	死後の占い	瓜の大事件	長崎の魚石	蜥蜴の目貫	×	×	×	×	×
※117参照	※116参照	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	二反の白※135参照	分別八十八※134参照	餅の木	海の水はなぜからい※104参照	槍を持った星
86	85		87	18	17	16												86	85	84	83	82

155	空の旅	○	
154	博奕の天登り	○	
153	下の国の屋根	○	
152	聳の世間話	○	
151	盗み心	○	
150	物おしみ	○	
149	慾ふか	○	
148	やせ我慢	○	
147	知ったかぶり	○	
146	×	木のまた手紙と黒手紙	⑨7
145	首筋に蒲団	○	
144	杖つき虫	○	
143	鳩の立ち聴き	○	94
142	清蔵の兎	○	
141	×	百足の使い	⑨2
140	×	そら豆の黒いすじ	⑨1
139	×	蛙の人まね	⑨0
138	×	鼠経	⑨9
137	古屋の漏り	※17参照	16
136	無言くらし	○	

【日本の昔話分布図】（新版掲載地図）

無印は旧版のものを残した分、○印は改定時増補分、数字は話の生理番号



【旧版限定話の分布図】（演習より作成）



四、考察

(一) 構成について

『日本の昔話』旧版と新版を比較すると、漢字や送り仮名の表記に差異が見られた。新版は全体的に平仮名表記やフリガナを付けるなどの配慮が見られ、柳田がこの本を発刊するにあたって重要視した「若者に読んでほしい」という意図がより強く感じられた。新版では地域性が濃い話、伝説的な要素が強い話は、絶対的ではないが排除の傾向にあるように思われる。話のテーマの流れや分類は、左記のように考える。

- 1 14・17 生き物の外見や鳴き声、生態等の由来
- 18 猿の愚かさ
- 15・16・19 27 因果の教訓を示すもの
- 28 35 伝説的要素の強いもの
- 36 39 悪(怪物や盗人)に仕返しをする
- 40・41・43・44 逃竄譚
- 42 狐退治失敗譚
- 45 噂話の真実
- 46 愚人譚
- 47 56 動物退治譚

- 57 64 夢などによる致富譚
- 65 70 長者伝説
- 71 悪人の改心
- 72 74 小さ子譚
- 75 77 継子譚
- 78 婚姻譚
- 79 婚姻譚(由来譚)
- 80 90 108 111 神のお告げ
- 81 85 異類女房譚
- 91 95 異郷譚
- 87 89 致富譚
- 86 88 96 97 99 100 善と悪
- 98 116 117 笑い話
- 104 106 113 由来譚
- 112 114 115 兄弟譚
- 103 仏教信仰
- 102 107 報恩譚
- 118 119 欲にとらわれる話
- 101 120 121 不思議な能力
- 122 神のお告げ
- 123 正直な男
- 124 二人の兄弟

125 ～ 132 大力
133 ～ 155 笑い話

これらを踏まえて、所収作品の配列は一部異同があるものの、新版は大方旧版にならっていると考えられる。ただし、テーマについての捉え方は様々に考えられ、これに限られるものではない。

(二) 個人考察

○高杉遊葉

旧版と新版で話の所収順の異なった17・「古屋の漏り」(新版所収)と137・「古屋の漏り」(旧版所収)について考察する。両者は同じ話であるが、重視されたテーマ設定が異なつたと考えられる。全体考察で確認した通り、話の所収順にはある程度の流れ、前後との繋がりが感じられる。それを踏まえ、「古屋の漏り」は、前者が「猿の外見」、後者が「笑い話」としてのテーマ性を重視したと考える。新版では1「猿の尾はなぜ短い」から続く、動物の外見や生地の由来を語る話の流れに凡そ準じていると捉えられ、「猿の外見」というテーマ性を重視し、17に配列したのではないか。一方旧版のほうでは、「古屋の漏り」の「人間と動物との葛藤する様子」や「意

味を取り違える滑稽さ」に笑いを見出し、133「旦那郎と田九郎」から続く笑い話の流れに組み込んだと考えた。

さらに、話のテーマを「猿の愚かさ」と表記した18「猿唞入り」についてもここで触れておきたい。「猿唞入り」は全国的に分布の見られる話であるが、その中でも『日本の昔話』に所収されたこの「猿唞入り」は、「娘がその後どうしたのか」という後日談的な要素が無いことが特徴に挙げられる。猿が水に流されながら詠んだ歌で締めくくっていることから猿の哀愁が印象に残り、読者の視点は猿に留まる。このことからテーマ設定は婚姻を回避した娘の方ではなく、婚姻がかなわなかった猿の方に焦点を当てたのではないかと考えられる。

ここで、「猿唞入り」の前後に配列された話と併せて見ていく。序盤に動物を主体とする話が並べられていることから、「猿唞入り」でも同様に動物に注目しなかったことが予測される。まず16「猿と墓との餅競争」では、独り占めしようと企んだことが仇となった猿の様子が描かれている。次に17「古屋の漏り」では、軽率に尻尾を井戸に突っ込んだが故に尻尾がちぎれてしまった猿の様子が描かれてい

る。どちらも猿という登場人物の「愚かさ」が描かれていることから「猿掣入り」の猿に関して、同様に「愚かさ」が伺えるのではないか。では、猿はどういった過ちを犯してしまったのか、19「山の神の靱」と併せて見ていく。「山の神の靱」に登場する山の神は客人をもてなすご馳走を用意しなければ子の命は無いと村人を脅している。ここには人間の神を尊敬する気持ちと、絶対的な神に逆らうことを恐れる気持ちが見える。人間と人間とは異なる存在とは、絶妙なバランスの上で共存しているが、「猿掣入り」で人間と婚姻を結ぶことを望んだ猿は、そのバランスを崩そうとしているように捉えられるのではない。

以上、「猿掣入り」という話の解釈は様々だが、ここで所収された話では、その特徴や話の配列から、交わるべきではない人間と婚姻をしようとした「猿の愚かさ」が主要なテーマであったと考察する。

○名護峻河

全体考察で、話のテーマや分類について分けてあるが、ここでは個人担当範囲の所収順について考察する。また、全体考察にもあるように、新版の配列が旧版にならっているという前提のもと考察を進め

る。

範囲は40〜79の40話、旧版に做えば「天道さん金ん綱」〜「竈神の起り」の27話である。この範囲で旧版は大きく二つに分類される。「天道さん金ん綱」〜「狐が笑う」までが一つ、「夢を買った三弥大尽」〜「竈神の起り」までが一つである。

まず、「天道さん金ん綱」〜「狐が笑う」までの範囲は大きな括りとして対人外（人外対人外を含む）という構図が見える。この範囲の話にはいずれにも動物や鬼などの人外のモチーフが見られる。その中で逃竄譚などの話の形式ごとに分けて所収されている。このまとまりは「猿の尾はなぜ短い」〜「牛方と山姥」までの32話（旧版による）からも繋がっているだろう。

次にまとまりの区切れについて、前のまとまりの最後である「狐が笑う」と二つ目のまとまりの最初である「夢を買った三弥大尽」は、丁度まとまりの区切れにあたる。つまり、「狐が笑う」と「夢を買った三弥大尽」の二話間では内容及びモチーフの交差が見られないのである。

二つ目のまとまりは夢買長者の話から始まり、そのつながりでそのまま長者譚・長者伝説に移行す

る。更に「二十騎が原」が長者伝説であるのに加え、子宝を象徴する話の内容となっている。その後「鶯姫」では長者譚と子宝の両方を引き継ぎつつ、女子の福分も盛り込んである。そこから「竈神の起り」までの話は継子譚、女子の福分など話の内容やモチーフが交差しており、旧版のこの順番に倣って新版では改版がなされていると思われる。

全体としてどこまでその分類がなされているかどうかについては、新旧版両方と更に各版全体としての考察が必要になるが、ひとまずその一助になればと思い、以上を一考察として提示する。

◇「藁しべ長者」と「藁しび長者」

新旧版両方に所収されている「藁しべ長者」は、新版において内容の異なる「藁しび長者」を所収している。旧版所収の「藁しべ長者」は『今昔物語集』「巻十六・参長谷男依観音助得富語・第二十八」、『宇治拾遺物語』「巻七・長谷寺参籠の男、利生にあずかる事・五」とほぼ同じ話型にあり、観音祈願型といわれる。新版ではこの全国的によく知られた観音祈願型の「藁しべ長者」ではなく、三年味噌型と呼ばれる「藁しび長者」を所収してある。これには柳田の昔話集編纂の態度がみえる。『底本 柳田國男

集 第六卷』「藁しべ長者と蜂」で柳田は次のように述べている。

一つの土地でほぼ同じ時代に、説話集を書けば重なるのは当たり前で、当時の話の有名だった証拠にはなっても、乙から甲を取ったということにはなり難い。むしろ知っていたら積極的に避けたと思うから、これはお互いに見せ合わなかった証拠かもしれぬ。

（なお旧字は新字に、歴史的仮名遣いは現行の仮名遣いに適宜改めた）

以上の文章は柳田の編纂への態度だと考える。『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』など比較的知られた古典作品の中で取り上げられ、且つ「藁しべ長者」のスタンダードともいえる観音祈願型は新版で所収するにあたっては少しポピュラー過ぎたのである。

昔話採集にあたり柳田は、日本が諸外国の採集活動に比べて遅れていることを憂えている。それは資料として残らないような文芸の消滅を危惧したからだろう。『日本の昔話』改版にあたって、観音祈願型の「藁しべ長者」を所収するのはその柳田の編纂態度に反したのではないだろうか。少しなりともマインナーな『藁しび長者』を所収することで、その話

の保存と流布に努めたのだろう。

○平田沙帆

全体の考察部分で話のテーマの流れを一つ示しているが他にも考えられるテーマの流れがあるためここで示していきたい。

104 「海の水はなぜ鹹い」は旧版ではその後「八石山」と「犬頭糸」の由来譚が続いているため旧版では由来譚として扱われていると考える。一方で新版は114 「海の水はなぜからい」があり112 「三人兄弟の出世」115 「餅の木」と並べて兄弟譚として扱われているのではないかと考える。また、新版で116 「分別八十八」と117 「二反の白」の所収順が旧版と異なっているのは、新版で133 「且九郎と田九郎」が削除され、137 「古屋の漏り」の所収順が変わったことによると考える。このことで、1として14 「海の水はなぜからい」から117 「二反の白」まで愚かさを表わしている話というテーマとも捉えることができる。

107 「狐の恩返し」は報恩譚と捉えているが、106 「犬頭糸」108 「聴耳頭巾」と合わせて動物話としても捉えることができるかと考える。

87 「大歳の焚き火」く89 「笠地藏」までは教訓が「情けは人の為ならず」という共通点があるため、87・

89の致富譚のあいだに88の善と悪を示す話が所収されていると考えられる。

ここで『日本の昔話』に所収される蛇女房についての考察を深めていきたい。蛇女房は、青森県から鹿児島県の喜界島まで全国的に分布しており、昭和五十二年の段階で約百話の報告例が見られる。目の玉型、蛇娘型、子残し型、蛇淵型、あと追い型、両親援助型などの型に分けることができる。『日本の昔話』に所収されているのは旧版・新版ともに目の玉型にあたる。目の玉型は、多くの地域に広く分布しており蛇女房の中でも一番有名な型である。ここで、蛇女房における蛇について考えていく。蛇は日本では水の神と結びつけられ霊的な存在であると考えられていた。「盲の水の神」と「蛇の玉」における蛇も、目の玉が不思議な効果をもたらしており霊的な存在として扱われている。この話において、蛇が女房となっているのは蛇が人間の近くに存在しており、水という人間の生命を握るものを司る神との結びつきがあったためだと考える。遠すぎない存在であったからこそ、たくさんの話が生まれたのではないだろうか。

蛇婿入りと蛇女房を比較すると、蛇婿入りでは蛇

は嫁に來た娘に殺されてしまう話が多いが、蛇女房の場合は蛇が自ら去っていく話が多く見られる。また、蛇婿入りでは子どもが出来る、または出来ても生んで育てる話は少なくなっている。しかし、蛇女房では子どもが生まれる話は多く、嫁が家を出た後も夫は残った子を大切に育てている。その結果子供が大成している話も見られる。蛇婿入りと蛇女房でここまで差が出ている理由として、結婚に至った経緯が大きく関係していると考えられる。蛇婿入り水乞い型では助けを乞う代わりに、爺が娘を嫁にやると口に出してしまい娘が異形の嫁にならなくてはいけないようになっていく。田に水を望む代わりに娘を欲するという構図は雨乞いの儀式に共通しており、嫁に出される娘は生贄となつていると言える。願いをかなえる代わりに生贄を望むものを人は恐れ、嫌つたということが蛇婿入り水乞い型には表れていると考えられる。一方で蛇女房では、結婚して出産するまで女房の正体が分かっていない。また、蛇が結婚した理由は男に乞われたからや助けられた恩返しにといった形になっている。ここに蛇婿入りのような生贄的な要素を見いだすことはない。蛇女房においての蛇(靈的存在)は、恐れられると同時に敬われ、人間に何

かをもたらし救ってくれるという面が強く出ていると考えられる。また、母体が異類か人間かという点も重要となっているのではないだろうか。蛇婿入りと蛇女房の子供の有無に人が異類の子(神の子)を産むことはできないが、異類(神)が人の子を産むことは可能だと考えられていたことが現れていると考えられる。

○三宅遥

担当範囲の旧版と新版の所収順の違いについて考察する。135 「分別八十八」、136 「二反の白」、138 「古屋の漏り」が旧版でこの場所に所収されているのは、134 「旦九郎と田九郎」から138 「古屋の漏り」までに愚かさを笑う話をまとめたためだと考える。新版で137 「無言くらべ」のみこの場所に残っているのは、132 「仁王とが王」とくらべる話としてつながり、夫婦の愚かさを笑いどころとすることで後の笑い話にもつながっていく話であるからと考える。

また、127 「大い子の握り飯」について考察する。大い子の話は、十三世紀前半に橘成季によって編纂された『古今著聞集』巻第十の相撲強力第十五に「佐伯氏長、強力の女高島の大井子に遇ふ事並びに大井子、水論にて初めて大力を頭はず事」という題で所

収されている。この話では題の通り、

佐伯氏長、はじめて相撲の節にめされて、越前の国よりのぼりける時、近江の国高島郡石橋を過ぎ侍りけるに、きよげなる女の、川の水を汲みて、身づからいただきて行く女ありけり。

『新潮日本古典集成（第五九回）古今著聞集 上』より引用）

という文で始まり、佐伯氏長との話の後に村人との田の水をめぐる話が続く。「大い子の握り飯」の伝承地や出典が記載されていないため『古今著聞集』が直接の出典かどうかは不明である。しかし、柳田が『古今著聞集』からひいた話であるとすると、佐伯氏長との話を後にすることで佐伯氏長を握り飯で鍛え上げた大い子の母性を強調しようとしたのではないかと考えられる。

五、参考文献一覧

- ・『日本の昔話』昭和五十八年六月二十五日発行
著・柳田国男 新潮社
- ・『日本の昔話』昭和三十五年五月十日改訂版発行

著・柳田国男 角川学芸出版

・『日本昔話辞典』昭和五十二年十二月二十日発行
稲田浩二 他・編（株）弘文堂

・『日本国語大辞典』(<https://japanknowledge.com/lib/search/nikkoku/?rows=20&q1=>)

・『日本昔話大成第一巻』昭和五十四年五月十五日
初版発行 著・関敬吾 角川書店

・『日本昔話大成第二巻』昭和五十三年二月二十八日
初版発行 著・関敬吾 角川書店

・『日本昔話大成第三巻』昭和五十三年五月三十一日
初版発行 著・関敬吾 角川書店

・『日本昔話大成第四巻』昭和五十三年七月三十一日
初版発行 著・関敬吾 角川書店

・『日本昔話大成第五巻』昭和五十三年九月三十日
初版発行 著・関敬吾 角川書店

・『日本昔話大成第六巻』昭和五十三年十一月三十日
初版発行 著・関敬吾 角川書店

・『日本昔話大成第七巻』昭和五十四年二月二十日
初版発行 著・関敬吾 角川書店

・『日本昔話大成第九巻』昭和五十四年十月二十日
初版発行 著・関敬吾 角川書店

・『日本昔話大成第十巻』昭和五十五年三月三十一日

- 日初版発行 著・関敬吾 角川書店
- ・『日本昔話大成第十一卷』昭和五十五年九月五日初版発行 著・関敬吾 角川書店
 - ・『日本昔話通観第五卷』一九八二年十月五日発行 編・稲田浩二／小澤俊夫 同朋舎出版
 - ・『日本昔話通観第七卷』一九八五年五月三十日発行 編・稲田浩二／小澤俊夫 同朋舎出版
 - ・『日本昔話通観第九卷』一九八八年一月十五日発行 編・稲田浩二／小澤俊夫 同朋舎出版
 - ・『日本昔話通観第十二卷』一九八一年三月一日発行 編・稲田浩二／小澤俊夫 同朋舎出版
 - ・『日本昔話通観第二十四卷』一九八〇年二月五日発行 編・稲田浩二／小澤俊夫 同朋舎出版
 - ・『底本柳田國男集 第六卷』柳田國男著 昭和三十八年十月二十五日 筑摩書房
 - ・「異類婚姻譚に見る日本人の自然観について——日本人は動物をどのように見てきたか——」著・名本光男 『城西国際大学紀要』／編・城西国際大学紀要委員会 19巻7号・環境社会学部・p33・44 二〇一一年三月
 - ・「日本昔話「猿婿入」にみる女性の意志」著・千野美和子 『京都光華女子大学研究紀要』／編・京都光華女子大学 49号・p1・11 二〇一一年十二月
 - ・「異類女房譚の分析」著・古川のり子 『学習院大学上代文学研究』／編・学習院大学上代文学研究会同人 13号・p17・24 一九八八年三月
 - ・「大力女譚の源流」著・益田勝実 『日本文学誌要』／出版・法政大学国文学会 37号・p2・12 一九八七年七月
 - ・『昔話の叙述の展開とその構造 異類女房譚を例として』著・川添裕希 慶應義塾大学国文学研究室出版 一九八六年
 - ・『新潮日本古典集成（第五九回）古今著聞集上』一九八三年六月十日 校注・西尾光一／小林保治 新潮社
 - ・『新日本古典文学大系36 今昔物語集四』一九九四年十一月二十一日 校注・小峯和明岩波書店
 - ・『新日本古典文学大系13 続日本紀二』一九九〇年九月二十七日 校注・青木和夫他 岩波書店
 - ・『日本古典文学全集28 宇治拾遺物語』一九八七年五月三十日 校注、訳・小林智昭 小学館
 - ・『新編日本古典文学全集10 日本霊異記』一九九五年九月十日 校注、訳・中田祝夫 小学館

結

本年度はコロナウイルス感染拡大予防のため、図書館等を利用した資料調査は困難を極めた。しかし、両版を精読することにより、昔話のテーマや本書の構成に関する理解を深めることができた。

今や古典文学の領域に等しい先学の調査成果の再読は、昔話研究において重要な課題である。そして、その経験が今後の伝承を支える一布石になることも確かである。

参考文献一覧（名護峻河）
結（藤井佐美）

―たかすぎ・ゆうは	日本文学科二年生―
―なご・りようが	日本文学科二年生―
―ひらた・さほ	日本文学科二年生―
―みやけ・はるか	日本文学科二年生―
―ふじい・さみ	日本文学科教授―

【本稿執筆担当者】

序（藤井佐美）

目次（平田沙帆）

昔話解説

1 ～ 39（高杉遊葉）

40 ～ 79（名護峻河）

80 ～ 119（平田沙帆）

120 ～ 155（三宅遙）

昔話一覧（名護峻河）

旧版地図（高杉遊葉）

考察（高杉遊葉、名護峻河、平田沙帆、三宅遙）